ぶどうの木

第 18 号

八幡前田教会
基督伝道隊　大濠公園教会
戸畑教会

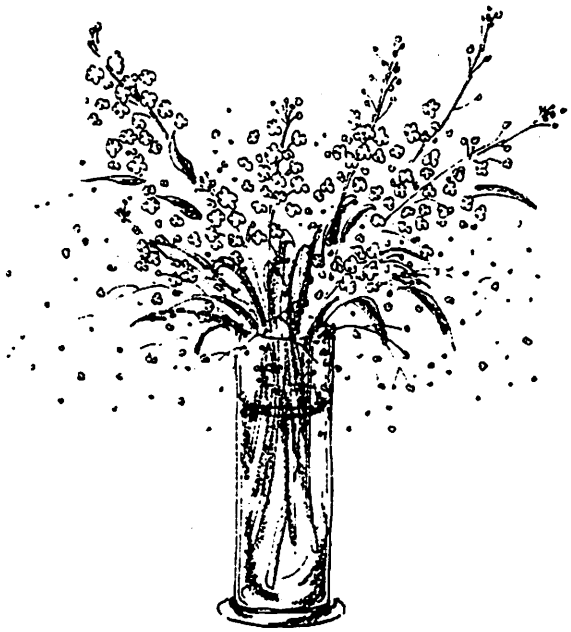
目次

巻頭言……榎本利三郎……(1)
信仰告白……津留崎晏子……(2)
受洗告白……大田敏夫……(3)
信仰告白……門司登子……(4)
信仰告白……高木シヅエ……(5)
神様と出会って……木元愛子……(6)
神様に従いたい……匿名……(6)
信仰告白……上田喜美代……(7)
エステル会研修旅行一九九〇……伊規須泰子……(8)
由布院研修旅行に参加して…門司澄子……(9)
エステル会研修旅行記……石田秀子……(11)
感謝のあかし……安東倫子……(13)
戸畑の住民となりて……久保田宮子……(16)
主のめぐみ深きを味わい知れ
主により頼む人は幸なり…畠山英子……(17)
すぎなの話……岩井芙美子……(20)
ぶどうの木の枝に新芽となって……大田敏夫……(23)
受洗とパーソナル無線……緒方昌隆……(24)
「感謝」……内田松枝……(24)
「主イエスを信じなさい。そうしたらあなたもあなたの家族も救われます」……熊谷千代子……(27)
主のものとされたさいわい…高木ツルエ……(28)
愛犬物語……緒方とみ子……(30)
主の御手にい抱かれた病院生活……藤掛邦次……(32)
「汝者従我」……H・T……(46)
「わたしの愛のうちにいなさい」……大楽明代……(47)
家庭礼拝……緒方とみ子……(51)
不便もまた楽し……伊規須泰子……(52)
神様はいつも……菊地修……(55)
永遠の課題……緒方とみ子……(55)
「死んだ犬」……野村末義……(58)
特集「燃ゆる柴」によせて……(61)
第一二回編集委員会議事録・感謝会……(62)
「燃ゆる柴」だより……(73)

巻頭言

榎本　利三郎

わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。（ヨハネ　一五・二）



「ぶどうの木」も主の豊かなめぐみと、農夫でいらっしゃる父なる神様に育くまれて一八号に成長しました。今年は台風一七号、二〇号が日本を南から北へ猛威を振って駆け抜け、各地に大きな被害を与えました。この「ぶどうの木」も様々な嵐の中に置かれましたが、農夫である父なる神様の御手に守られ、豊かな実がなり感謝です。美味しく熟成され芳香を放つ実が、主の聖手に納められ感謝に耐えません。

一九九一・一二

信仰告白

津留崎　晏　子

このたび、主のお恵みによりまして受洗させていただける身分と変えてくださった事に、心から感謝致します。

本当に長い間の教会生活の中で、先に救われた主人と一緒に、聖書を読み家拝をしながら、祈れば必ずこたえてくださる事、いつも共にいてくださって、祈り待ちのぞめばいかなる時にも最善の事をなしてくださる事等、聖言をとおしていろんな恵みを体験させてくださいました。それに、私にとって最高の恵みは、北九州に来てちょうど八年になりますが、今、牧師館のお手伝いをさせていただいている事です。週に三回お伺いして、朝から夕方まで百合子先生と生活を共にし、いろいろとお手伝いをしております。私のする事ですから、気にいられない事も多いと思いますが、いつもにこにこと優しく、喜びと感謝にみちていらっしゃるお姿を拝見し、自分の生活態度をみて、同じ人間に生まれながら神様をうやまわない生活が、こうも惨めな事かと痛切に感じさせられました。こう言う恵みの中におりながら、心を閉ざし、背をむけて、自分勝手な道を歩いてまいりました。それでも尚、「我に帰れ」と、長い間待ち続けてくださいました。失敗だらけの愚かな者のために、十字架にかかってまでも私を贖いだしてくださいました。今までの罪を認め、悔い改めて、百八十度方向転換し、生まれ変わって、求道者会で教えられました様に、今生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めながら、主に喜ばれる神の子としての生涯を送りたいと願いながら、受洗の決意を致しました。今後も、皆様方のお祈りの中に加えていただければ、幸いに存じます。ありがとうございました。

受洗告白

一九九一・五・三　憲法の日

大田　敏夫

私は今年七六才となりました。長い間、皆様から温かいお交わりをいただき、お祈りをいただきながら、生はんかな信仰生活を送って参りましたが、皆様のお祈りのお陰で、昨日（五月

二日）榎本先生より個人伝道をしていただき、その席で私は、過去の過ちをはっきりと認め、生まれ変わって神様にお従いすることをお約束致しました。そして先生より、神の子になったとして祝福を受けました。今、かつて無い喜びを胸に感じ、感謝しております。

思えば随分長い間、道草を食って参りました。終戦迄の若い時代に、私は、真のクリスチャンである若い伊藤の大将を社長として仕え、可愛がっていただいたお陰で、今日まで私の心の中には、薄い淡いものながら、キリスト精神が流れていたことを自分自身で感じておりましたが、それは信仰とは程遠いものでありました。

私は、商売柄、お酒をいただきます。そして与えられた仕事の関係で、日曜でも働かなければ気のすまない古さを持っております。まだ若い、シャバ気も多い人間です。お酒は飲んではいけない、日曜礼拝には何を差し置いても、という信仰生活は暫くお預けにして、もう一寸年を取ってから……と考えて、つい時計を見ながら、居眠りをしながら、先生のお話しはいいお話しだなーと聞いておりました。

しかし、礼拝に出ると濁りから解き放なされてとても澄んだ気持ちになることが出来、今は進んで日曜礼拝にだけは出させていただくのが楽しみとなっていました。

今からもう二〇数年前に、野村先生から次の聖言を書いていただきました。

「汝ら心に憂ることなかれ、神を信じ、また我を信ずべし」

（ヨハネ　一四・一）

この聖言は、以来常に私の机の前に掲げて、何時も励まされて参りました。その間にも、信仰とは何か?、信仰とは十字架の上で私達の罪の犠牲となられたイエス様を救い主と信じることだと教えられましたが、何故か罪の意識のないまま、そこから一歩踏み込む勇気のないまま、今日に至りました。

しかし、このままでは、総てに中途半端な人間となってしまいます。今年七六才、やっと仕事の方も一区切りをつけることが出来ましたので、今度こそ、今までの迷いから目覚めて、清水寺の舞台から飛び降りる決心を固め、長い間見守っていただいたイエス様の懐に飛び込む決心を致しました。

イエス様に初めてお会いしてから約六〇年となります。その長い間、神様はよく辛抱されて、ともすれば横道にそれたがる私を、今日まで引っ張っていただいたことを感謝致します。

昨日榎本先生より、ローマ人三章二五節の聖言を教えられました。

「今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられた」

この聖言を教えられた時、私はハッとして、顔をピシャリと叩かれた様な気が致しました。神様申し訳ありません。そして神様に対し、これからきっと悔い改めますとお誓い致しました。

今までの怠け者が、一挙に生まれ変わることはとても難しいことだと思います。しかし、そうなろうと今日決心した以上、きっと生まれ変わって素直になり、皆さんの仲間に入れていただき、そのお祈りの中でイエス様を崇め、主によって生かされている自分をはっきりと認め、その上に立って神様に一切をお任せして、残りの人生を、主の恵みにお応えして送りたいものと心から願っております。

今私は、神の子とされて子供の様に胸がはずんでおります。どうか私のこの心がしぼまない様に、皆様のお祈り中に加えていただく様お願いして、受洗の告白と致します。有難う御座いました。

信仰告白

門司澄子

日曜礼拝に出席させていただき、二年半ばかりたちました。主人が八年前に安川電機を退社し、小さな会社を創立いたしました。以来、無我夢中で主人と共に頑張って参りました。

サラリーマンをやめた以上は、自分達の会社を軌道にのせる迄はと、一生懸命でしたが、それ迄の身体の疲れと心のゆるみもでまして、五年目位の頃に体調を崩し眠れない日も多く、頭がとても重く、辛い日々で起きあがる事もできず、日常の生活すらできなくなっていました。

今迄は少々無理をしても元気だったものですから、健康の有難さというものがどんなに大切かという事も、その時身をもって知らされました。自分の力で努力すれば何でも出来るという、思いあがった気持も一度に吹き飛んで行きました。

この前田教会には、お隣に住んで居られた藤本さんを通じまして、御縁をいただきました。

今迄の自分の思いあがった気持がどんなに間違いであったか、神様に依って生かされている自分であるという事も本当によくわかりました。

これからは新しく生まれかわり、信仰をもって日々進ませていただく事ができたらと思い、バプテスマをうけることにいたしました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

信仰告白

高木　シヅエ

私は現在、水巻町の共立病院で看護婦として勤務しております。

私は、以前兄より、「百万人の福音」を相当長い期間送って貰いました。又、教会に行く様に進められたりしました。しかし、信仰心はなかなか起こらず、そのまま過ごしました。

ところが昭和六二年の九月、胆石除去手術のため産医大病院に入院する事になり、ここで、諸検査の結果思いがけず卵巣腫瘍が発見され、胆石手術と併行して卵巣除去手術も行う事になりました。このため、榎本先生をはじめ、教会の皆様からお祈りしていただきました。

手術は成功のうちに終りました。この二つの外に、三つの臓器を摘出したそうです。悪性のためこの処置をとったということでした。

手術後、主治医が兄に、九五パーセントは悪性で、今後抗癌剤を十回点滴し、一年位入院せねばならぬと言ったそうです。兄は、毎日病院に来て祈ってくれました。先生はじめ、皆様の祈りにこたえられ、手術のあとも痛まず、抜糸のあとも痛みませんで、すべて順調でした。

十月下旬、兄が主治医から呼ばれ、もう病気はなおったので二九日には退院してよいと言われたそうです。一回も抗癌剤の点滴もせず、短期間のうちにいやされたのでした。

私はこの時始めて、神様がいらっしゃること、そして祈りに答えて下さる事を知りました。私はこの経験をきっかけに、神様を信じるようになりました。そして今後はできる限り礼拝に出席し、神様についてさらに知らせていただこうと決心しました。そのため日曜の日勤など断わって、つとめて出席しました。こうして、榎本先生の御説教や説教テープ等を通し、神様がどんなお方であるか、又、私たち人間が神様の前にどんな者であるかを少しづつ知らせていただきました。去年頃から、洗礼を受けてイエス様を信じていこうと思っていましたところ、求道者会がひらかれましたので出席させていただき、今日に至りました。　私が今まで知りましたことは、神様はただおひとかたであること、そして天地の万物をお造りなった創造者でいらっ

しゃること、そして最後に人間を神のかたちに創造し、万物の霊長として地球上におかれた事など知りました。神様からつくられた人間は、神様を敬い、信頼し、み旨に従って生きるのが人の本分であることを知りました。

この神様を信じる事をせず、自分勝手な生活をすることが、一番大きな罪であることを知りました。今までの私は、自分本位の勝手気ままな生活で長年過ごし、神様のみ心をいためた罪人であったのです。

この様な私の罪のため、神様はイエス様を地球上に下し、私達罪人の身代わりとして十字架につけ、この事実を信じる者を救って下さるという、救いの道をひらいて下さったという事も受け入れました。

神様と出会って

木元　愛子

私は、母がリウマチで手足が不自由だったので、長年に亘り母の手となり足となりの生活を続けて参りました。

仕事との両立で、色々と大変な時期もありました。けれど、これが自分に与えられた道だと思いながら頑張って来ました。

しかしながら、両親を最後まで見届けてしまってからは、心に大きな穴があいた様な気がして、今まで張りつめていた気持ちも全てくずれ、健康のこと、将来の事等と不安も多く過ごしておりました。そんな時に神様を知る機会を与えられ、共にいて下さる神様を信じバプテスマを受け信仰していきたいと願っております。ありがとうございました。

神様に従いたい

匿名

私が最初に神様の事を知ったのは、大学に入ってからでした。三年の時、香椎にある教会に導かれ、度々顔を出すようになりました。でもその時は、自分が何か特別の存在で、神様から祝福されるべき存在であるかのような錯覚をしていたように思います。神様が私たちを（私を）愛して下さっているうれしさはその時も感じましたが、それがいつの間にか当然のことのように感じていました。

今でも「なぜ神様は自分を作ったんだろう。」と、素直な感謝ができない時もあります。また、「全部を神様にゆだねる」

こともできません。神様の愛の中にいながら、「これぐらい大丈夫だろう。」と罪を犯すこともよくあります。自分が本当に弱くおろかで、みにくい罪人であることを感じます。こんな私のために、神様は一人子を十字架にかけて下さったというのに、今のままでとどまっていようと思ってました。自分が楽な（肉体が楽な）方法を選ぼうとしていました。

しかし、今度、その弱さも全部さらけ出し、神様に従うために、これからの生涯を送りたいと思います。まだまだ肉体の思いにとらわれやすい罪人ですが、神様をおそれ、敬っていく生涯となりますよう、信仰をもっていきたいと思います。

信仰告白

上田　喜美代

「伝道者は言う、『空の空、いっさいは空である』と。」

伝道の書一二・八にある様に、私も、子育ても終わり停年を迎え、毎日が怠惰で、高慢な私は今迄のこの幸せを感謝することも知らないでいました。五年後、一〇年後と、同じ毎日を繰り返すのかと思うと、なんと空しいものであるか、何を生き甲斐に求めたらいいのか渇いていました。

娘に誘われるままに教会に導かれ、聖書も与えられ、先生のお話しを聞いているうちに、私の求めていたものはこの福音だと気がつきました。

でも悟る事だけでは、聖書の入口も見出す事はできない。

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ三・三）

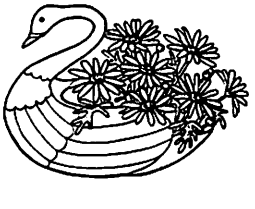
「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」（ヨハネ三・五）

この聖言を与えられました。

新しく上より与えられる神の聖言により、神の聖霊により、新しい人生に生きる者となる。

イエス様の尊い十字架の血潮にて、高慢な私の罪があがなわれ、復活された新しい命の力によって、罪深い姿のままの私を受け入れて下さり、私を罪から救い出して下さった事を教えられました。なんと尊いお恵みでしょう。心から感謝いたします。

「信じます」。私の生涯かけてイエス様にお従いして行きます。



エステル会研修旅行一九九〇

伊規須　泰　子

◆ごかんべんを◆

一年前、八幡前田教会エステル会の研修旅行に加えていただいた。さて一文を書こうと資料を探してみたが…、あゝそうだった、引越しのため、過去の書類をできるだけ処分したのだった。そこで、心にやきついていることのみでごかんべんを……。

◆ゆふいんの森号で◆

一九九〇年五月二九日火曜日九時四〇分発、博多駅から、夢の「ゆふいんの森号」へ乗せてもらった。夢の列車は美しい自然をぬって、ひた走りに走る。可愛い画廊車輌もあって心はなごむ。会話もたのしくはずみ、やがてお洒落なゆふいん駅へ到着。感謝の一足一足で、田植えのすんだ緑風吹く道を心地よく歩き、高台の宿泊所〝ゆふいん夢想園〟に着いてホッ!!

◆ウワーすてき、由布岳◆

かつて、遠くから頭の上だけ眺めていた由布岳が、今、目の前に全貌をあらわした。美しきかな、尊きかな、包まれるような暖かさ。

＝われ山に向かいて目をあぐ
わが助けはいづかたよりきたるや＝

この時の「山」は、私にとって、神様の創造なさった山、豊かな山、恵みの山、望みの山、賛美の山、胸がキューッとしめつけられる思い。

◆恵みの集い◆

聖言を聞く集いは三回。「今」与えられている「今」が恵みの時だよ。神の喜び賜うささげ物を。喜べ、祈れ、感謝せよ。集会に近づけ、とおすすめ。

夜の集いで、一人一人のざっくばらんのおあかし。こういう機会でないと、なかなか自分をさらし出せない。ありのまゝの姿を喜ばれる神様。夜の更けるまでたのしい集いはつづいた。

◆野の花を見よ◆

三〜四人づつの部屋割。並んだ部屋の名前は花の名。かえで、すみれ、たんぽぽ、りんどう、なでしこ……別館で一人は、ふたご。

美しき花たちは、それぞれの花園でゆっくりと憩いました。

◆湯けむりに包まれて……露天風呂◆

タオルを下げて、下駄をつっかけ、カランコロンといざ露天風呂へ。家族風呂、大小の露天風呂、混浴の露天風呂も。底には石ころ、縁は大石の囲い、中央に岩があったりして、お湯は

コンコンと吹き出ている。囲いは生け垣。星を仰ぎつ、身も心も洗われて最高、最高!!

◆散　策◆

カッポカッポのロバの馬車に乗りたくて出かけたが、時間の都合で駄目だった。そこで散歩。並木道、田んぼ道、川のふち、気持よく歩いて民芸館へ。昔の生活をしのばせるものだった。

◆さて、二日目◆

〜〜記録を残していないので、どうも〜〜

朝食をすませ、集会が終って、タクシーで出発。天井桟敷（?）でおみやげを買ったっけ?

ジャンボタクシー二台に分乗して観光へ。山奥深く進んで、目の前に、湯けむりの立つ凄い山を真近に見て感激。自然の偉大さ、あれは何という所だろう。（克明な記録者の文章によって知りたいもの）。

明礬地獄のすざましさ、狭霧台からの眺めのすばらしさ。あれもこれも神様のわざ。

更に、神様の与えて下さった知恵によって建てられた、東洋一のコンクリートアーチ橋などに驚嘆しながら、昼食場所、ホテル観海荘についた。

ここでジャンボタクシーとわかれ、別府一五時一四分発、にちりん三六号で、一路小倉へと向った。

◆ありがとう◆

戸畑教会へ変わったのに、今度もさそって下さってありがとう。自然は大好き。神様のみわざをまざまざと感じるから。更に、人との交わりのなかから、神様のみわざがあふれてくるし、感謝、感謝の旅であったと思い出す。

記録は失ったが、心からわき上る喜び……温泉がふき出るような……を感じて、一年後の今、改めて感謝した次第。

不十分な文章でごめんなさい。お世話して下さった方、交わって下さった方、ありがとう。主の祝福を祈ります。

一九九一・五・三一

由布院研修旅行に参加して

門司澄子

楽しみにしていたエステル会の旅行に初めて参加させていただき、大変良い想い出ができた事を感謝して居ります。

今振り返って、由布院の旅の足跡を訪ねてみました。お天気の方も前日から心配しておりましたが、その日は神様から祝福を戴いたのでしょう、カラリと晴れた良いお天気に恵まれ、小倉、八幡、黒崎から参加者の方々が各々特急に乗車し、博多で

下車して目的の由布院を目指し由布院の森号の出発です。

車中では童心にかえり、おやつを戴いたり、賑やかなお喋りのうちにあっという間に由布院駅に着きました。今日の宿泊先である山の上ホテル夢想園迄タクシーに分乗しました。山の上ホテル夢想園から見る由布院の景色は格別でした。自然の豊かさが残り、青い空と由布岳を中心とした峰々、木々の緑、田畑と町並み、各々が素晴らしいハーモニーを描き出しています。

由布院は周囲千メートル以上の山々に囲まれた盆地で、九州の軽井沢の名にふさわしい、ヨーロッパの片田舎のムードを持っていて、素朴な中にもどこか都会の香りを漂わせている素晴らしい自然の恵みにあふれた町でした。

四百年の昔、キリシタンの理想郷だったこの地に人々は現代の理想郷を作ったのだな、としみじみ感じさせられました。

お昼のお祈りをすませた後、昼食をとり、休憩の後、各々自由行動にうつりました。榎本先生を初め一〇人位で駅の観光辻馬車に乗る予定で、申し込みをしましたが、予約で満席のため乗れず、仕方なく徒歩で一五分位歩いたでしょうか、民芸村を訪ねました。

明治初期の酒蔵を解体して造ったといわれる民芸館には陶器、竹工芸、民具等が展示されており、ガラス工芸館ではビードロの制作工程がみられました。近くには大正時代の郵便局を移築した郵便資料館などもあり、昔をしのばせる数々にめぐり会う事ができました。

民芸村の見学を終え、皆で又、瞳が緑に染まってしまいそうなタップリの自然につかりながら夢想園へと帰ってまいりました。

日頃余り長く歩きなれないものですから足はガタガタ、お腹はペコペコでした。若人私達でさえ（世間では中年）疲れ果てていましたのに榎本先生は背すじをピンと正して、先頭に立って歩いておられたのには、ただ、ただ驚かされました。信仰を持って長い間歩き続けて来られたという事がどんなに素晴らしい事であるかという事もあらためて感じさせられました。お祈りをすませた後、夢想園の料理に満喫し各室に戻り、その後、榎本先生のお部屋に全員集合して讃美歌を歌いお祈りが始まりました。

その時先生から戴いた聖言は、マルコによる福音書一三章の「気をつけて目をさましていなさい。その時がいつであるかあなたがたにはわからないからである」でした。今迄いろいろな旅行にも参加しましたが、今回の旅行は、皆、和気あいあいとしていて、心が一つになってとても新鮮な気持で一杯でした。

夜は夢想園の露天風呂につかりながら夜空をながめて、旅の情緒を楽しむ事が出来ました。

翌日には下人湯のすぐ横にある金鱗湖に行きました。ここは湖の西半分は温泉で東半分には冷泉が湧いていてコイがよく育つことからこの名前がついているそうです。湖の廻りにはクレソンの花が咲きみだれていました。

金鱗湖を一廻りして後、小型マイクロバスにのって狭霧台、塚原温泉、硫黄のにおいのたちこめる明ばん温泉へと山なみハイウェイを走ってまいりました。

昼食は別府の観海荘でとり、別府から帰路、小倉へと帰ってまいりました。教会の信者の皆さんとこの様な素晴らしい時を持たせていただく事ができました事を感謝し又、留守を無事守って貰った主人をはじめ、子供に感謝しながら、無事帰途に着きました。

私にとって非常に有意義な旅行の一つであったと思っています。

エステル会研修旅行記

石田秀子

四月二九日、祈り待ち望んだ出発の日です。お天気も良く、神様の祝福を感謝しつゝ「ゆふいんの森号」に九時三二分乗車。一度乗ってみたいと思っていた私は、主のお恵みで願いが叶って、心は浮き浮き、少しリッチな気分で早速車内見学。床は板張りで車輌と車輌は階段で結ばれ、喫茶室あり美術室ありの快適な汽車です。一二時に由布院に着き、車で夢想園へ。高台に有るとても素敵なホテルで、由布院盆地の展望も又格別、素晴らしい景色に恵まれた所、それを創られた神様を讃美し、心もお腹も満たされてさあ自由行動。辻馬車に乗りましょうと駅に急ぐ。あゝ残念時間が折り合わず！民芸村に行くのに徒歩組（先生）、車組（百合子先生）二手に別れて出発。先生に引率されて川の流れに添っての道すがらの楽しい交わり、嬉しくて小学生になった様な気分で心がはずみます。三時にチェックイン。夢想園離れ「なでしこ」が渡ヶ次姉、木元姉、門司姉、私の部屋です。部屋割が終わって間もなく、先生の部屋で第一回の集会が与えられました。

○マタイによる福音書　第二五章　一三節

「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである」

○コリント人への第二の手紙　第六章　二節

「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救いの日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、

見よ、今は救いの日である」

今、この与えられている時を大切に、主に従って行く事の出来るよう、目をさまして祈り求めて行こう！主を知る事を、感謝と讃美の内に一回目の集会が終りました。同室の姉妹方と、さあ露天風呂へ。幾つも有って本当に素晴らしいお湯です。一日の疲れを洗い流して心も体もリフレッシュ！

夕食前の楽しい語らい。木元姉、門司姉とも永年の友達の様に親しく交わりをいただいて、主にある事を喜び、御名を崇めて感謝致しました。夕食も珍しい御馳走を戴いて、あゝ幸せ。七時から二回目の集会です。

○マルコによる福音書　第五章　二五節ー三四節

「……イエスはその女に言われた、『娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい。』」

○ローマ人への手紙　第一一章　三六節

「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アァメン」

○ローマ人への手紙　第一二章　一節ー二節

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」

この集会で先生が、家拝をどの様にしていますか、聖書をどの様に読んでいますか、とお聞きになり、一人一人順々に普段行っている事をお証しする。信仰の先輩である姉妹方の、神様の前に自分を置いての真剣な生活態度、色々な事を多く学ぶ事が出来、日々の歩みをチェックする大切な時が与えられて本当に感謝でした。主にある楽しい交わりの後、今日一日主に生かされ、主が共に居て下さり、霊肉共に豊かに祝福いただいた事を感謝し床に入る。早朝に目がさめ朝もやに煙る露天風呂へ。今日も感謝な一日が始まる。七時四〇分に朝拝

○テサロニケ人への第一の手紙　第五章　一六節ー一八節

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。」

一日の始めに主を崇め讃美し、聖言を戴だく。「まことにわたしは、良い嗣業を得た」。朝食の後、九時三〇分夢想園を出発。金鱗湖周辺散策。おみやげなど買い求める。一一時三〇分ジャンボタクシーで塚原、十文字原を経由し、別府ホテル観海荘で昼食の予定でありましたが、主のお恵みにより、とても良い運転手の方が与えられ、途中、塚原温泉、明礬地獄など見学させていただき、又、十文字原高原では、素晴らしい景色を望

み、創り主なる神様を讃美致しました。

ホテルでのリッチな昼食の後、一五時一四分「にちりん三六号」にて帰途につく。先生御夫婦をはじめ、お交わりを頂いた姉妹方、有難うございました。又、色々と心のこもったお世話をして下さいました方々、心から感謝致します。お祈りを下さいました方々、有難うございました。主の恵みを味わいつつ、主を崇め感謝致します。

感謝のあかし

安東倫子

私は、福岡県北九州市八幡で生まれました。一九〇一年製鉄所発祥の地です。

家族は、明治生まれの祖父母、大正生まれの両親、五人兄弟の三番目です。上に姉が二人、下に弟が二人います。生家は、何代か続いた禅宗のお寺の役員をしております。又、神棚と仏壇がありますので、小さい頃から月に一度、神主さんとお坊さんが来られていたのを覚えています。物心ついた頃、母は病院のベッドの上でしたので、私は祖母から育てられました。

祖母は、いつも「人がみていなくても、おてんとう様がみているので悪いことをしてはいけない。」と言うのが口癖でした。何か願いごとがあれば、神棚と仏壇に手をあわせればよいと聞いていましたが、願いごとはかなえられませんでした。私は、世の中は良いことは少なくて悪いことが多いなあ、と子供ながらに思いました。中学校に進級する時、担任の先生から私立のミッションスクール（戸畑にある明治学園）に入学させてはどうか、と話がありましたが、公務員の父は、五人の子供を教育するのに一人だけ私立にやるわけにはいかないと断わりました。

高二の時、クラブ活動で新聞部に入り、一級上の先輩がカトリックのクリスチャンでしたので、礼拝に連れていってもらいました。丸く切ったパンを、献金の後に食べたのを覚えています。神父様の話は覚えていませんが、人は皆、罪人だということだけが心に残っています。

「女は高卒で充分、後は嫁に行くのだから」と言う父の考えで、高校卒業後、銀行に就職しました。本当は教師になりたかったのですが…。

就職して、お金に対する人間の裏表をみるにつけ、私の青春はこれで終るのだろうか、何とかしなくてはと思い、夜間大学に行く決心をしました。入学金を貯め、親に内緒で受験し、合格したのは二〇才でした。遅刻、休みも多かったのですが、友人もでき楽しい学生生活が始まりました。

月日がたつにつれ、職場内で雰囲気がギクシャクしてきて、退職した方が良いのではと感じる様になりました。

私は、学生自治会のアルバム編集員の一人である、夫と出会いました。彼は、いつもにこにこしているおじさんという感じでした。(黒いヨレヨレのスーツに流行遅れのネクタイをしていたので)当時、夜間大学生は、おじさんが多く、若い男性には、あまりおめにかかることが無かったのです。銀行を辞めたいのだが迷っている、と相談しました。当時、女性が退職する時は、結婚か悪いことをした時と相場がきまっていましたので、世間体を気にする私は決心がつかなかったのです。教会へ行ってみないかと言うことになり、昭和四四年五月、八幡前田教会の、日曜日の夜の伝道集会に出席しました。

榎本牧師は、ご自身の証、しかも失敗談をよく話されましたので、楽しく聞かせていただきました。耳が少し悪いせいか、讃美歌は調子はずれ、でも大きな声で歌われました。良い声でない私は励まされ、讃美するのが楽しくなりました。聖書は神様が私たちに下さった愛の親展書です。平仮名・カタ仮名が解る人は誰でも読めます。祈り、聖書を拝読し、集会にできる限り出席しましょうと、いつも励まして下さいました。祈りに答えられ、新しい職場が与えられました。大学へ歩いて二〇分。平日は九〜五時まで勤務。土曜は一二時まで、月二回は土曜日が休日。以前の職場と比較すると、時間的にも経済的にも祝されました。

昭和四六年四月に受洗。今年で二〇年になります。夫と出会い、三年後の昭和四七年五月に結婚。

結婚する時に夫から与えられた聖言は、Ⅱテモテ書一・七〜八です。私達はクリスチャン一世ですので、勇気づけられました。友人は、「今どき、酒もタバコもマージャンもやらない人は、おかしい」。彼はクリスチャンだと言うと納得。祖母は、

「女は一度結婚するものだから、うまくいかねば帰っておいで」と言い、母は、「経済的に苦労するし、農家の長男の嫁は大変だよ」と言うと、私は、「彼は神様を信じているので普通の人とは違う」と答えましたが、二年分の洋服・下着・靴等を持って嫁ぎました。でも、サイズが合わなくなって、親しい方に、さしあげました。人間のすることはおろかですね。

夫の給料がいくらかを聞かず、新生活がスタートしました。初めての給料を一週間で使ってしまい、夫を驚かせました。魚は白身の物、鶏肉はささみ、牛肉はヒレという食生活をしていました。結婚して仕事を辞めたので、失業保険を受給する時に、職安の窓口担当の人から夫の職業を聞かれ、「隣の食糧事務所に勤務しています。」と言うと、逆に慰められたのを覚えています。当時、私が働いていた時の手取とほぼ同額でした。これで二人が生活するのですから無理もありませんが…。この中から献金と教会へ行く交通費（自宅から教会までバス・電車を利用して一時間）で三割を占めました。ある時、献金を少し減額させていただくと楽になるのにと思ったことがありました。献金袋に入れて献げるのではなく、礼拝の時に献げるのですから、誰がいくら献げているか、神様だけがご存知なのです。

ある集会で、マラキ書三・一〇を示され、レプタ一枚を献げたやもめさんの話を引用され、金額の多少ではない。富める主は、貧しい人からとりあげる方ではない。必要なだけは満たして下さる主に、心から感謝して献げなさいと先生は話されました。私の心は、ふっきれて、きちんと守らせていただき今日に至っています。

夫の母から「給料・ボーナスから十分の一も献金するのは大変だから少し額を減らしなさい。そんなにきちんとせんでもいいのではないか、それより貯金をしなさい。」と言われます。私は、「お母さん、篤良さんは、酒・タバコ・マージャン等、やらないので色々な誘惑から守られていますし、体にも良いのですよ。」と説明しています。

来年、大学入試を控えている託往から、「お母さん、家は貯金がどの位あるの」と聞かれ「天国の銀行には、たくさんあるのよ」と言いましたが、「家には車・ビデオ・大形テレビもないし、どうみても不安だなあ。やっぱり私大は無理かな」と案じております。

今も生きておられる主は、マタイ伝六・三三の聖言の様に、私の上に成就して下さると信じ、感謝の毎日です。ー終りー

（本年四月二八日、礼拝を守らせていただいている広島平和教会の礼拝で、証をする時が与えられました。少し手を加えた所もありますが、私の主に対する感謝をさせていただきました。）

戸畑の住民となりて

久保田　宮　子

「光陰矢の如し」と申しますが、月日の流れは速く、何もわからず受洗させて頂いてから早九年、この様な尊い身分にされた事がわかるにつけ、今更ながら震えおののいております。

現在住んでいる場所は便利がよすぎて、音に弱い私にとっては住みにくく、主人の満期を待って、空気の良い静かな赤間方面に永住を考えておりましたが、神様は不思議な事をなされるお方で、東京に住んでいた長男夫婦が隣に住み、二女もすぐ近くにマンション購入、それぞれ子供に恵まれ、私も孫が可愛くなり動く事の出来ない状態になりました。

奇しくも、戸畑教会の発足と主人の満期が同じで、乗物があまり好きではないので、榎本先生にお願いして戸畑教会に籍を移して頂きました。各集会にまじわりをもたせていただいている内、不思議な事にこの場所がとても好きになりました。教会まで歩いて一三分、特に早天祈祷会が恵まれます。四季を通して、朝早くしか味わえない自然の恵みに感謝しております。

妹が、以前より「近くに先生が二人もいらっしゃって、教会は近くにあるし、いいわね。」と言ってた気持ちがよくわかります。

戸畑教会は、八幡と違って少人数ですが、とても家庭的で、何もかも神様が御承知の様に…御迷惑かとも思いますが、牧師先生には何んでも話せるのです。

今は隣をおかりして仮りの教会ですが、九月頃には完成の予定ですので、毎日祈り続けております。「神のみ心のままになさしめ給え」と。

すばらしい恵みの門が開かれておりますので、一人でも多くの方が心を合せて祈る事が出来ますよう、まず我家より神を恐れかしこみ、神と人とに喜ばれる家庭を築くよう祈る事が、私の務めだと思います。

神様と共に住む日を喜びぬ
二人の孫と天を仰ぎつ

主のめぐみ深きを味わい知れ
主により頼む人は幸なり

畠山英子

◆これは私の家の新築の時、河本のおばあ様からいただきました壁かけにある聖言で、いま私の家の御座敷にかけてあります。主は今日に至るまでこの聖言通りに、私に恵みを与えて下さいました。

◆朝から夏の日ざしが照りつける八月――三〇?年前の日曜日です。生後八ヶ月の義信をおんぶして、五歳、三歳の、宏、三代子をつれて、聖書とおむつを持ち、曽根のバス停に立ちました。八幡前田教会へ行くのにはあまりに遠いので、榎本先生にお願いして、小倉駅前の博労町教会、山田益先生の所へ行かせていただいていました。

財布の中身は五〇円一枚。五円のキャラメル二個買って、二人の子に持たせました。小倉駅まで三五円の時です。残るは財布に五円一枚だけ……帰りのバス代はありません。その時はただ、日曜の礼拝に神様のみもとに行きたい一心でした。私の全財産はたった五〇円だったのです。畠山の印刷会社は不況をきわめ、給料は遅配、欠配がつづきました。苦しい月日がつづいていました。

でも、礼拝に出させていただいた心の喜び、安心感で一杯です。礼拝がすみ、他の信者さん方はみな裕福な立派な御方や親切な御方でしたが、横にいたお子さんがお母様に、「井筒屋へ行って御食事をして買物をするのよね」とお話していました。私の横に腰をかけて五円のキャラメルのあき箱を持っている二人の子供を見て、とうとう涙がこみあげて来ました。「山田先生、この通帳を担保に、まことにすみませんが、帰りのバス代をお貸し下さい」――山田先生は、「担保は無用です。一〇〇円でよろしいのか?」と貸してくださいました。そして家に帰りついたのです。

◆子供も手があまりかからなくなりました。生活が出来ないので、畠山は印刷会社をやめて、「二神」に就職致しました。だんだんと神様からお恵みをいただいて、とうとう独立を致しました。馴れない仕事で苦労をいたしますが、主は一つ一つ助けを与えて下さるのです。

私は自転車を買って、近所、曽根を走りまわりました。外に出ますと目の前に貫山が見えます。

「われ山に向かいて目をあぐ、わが助けはいづこよりきたるや。我が助けは天地をつくりたまえるエホバよりきたる」

（詩篇一二一・一―二）

自転車に荷物を積んで山に向かって主に祈りながら、松林の

中で自転車をとめて、五つのパンと七つの魚を祝された主に祈りながら、商売に励みました。

◆主は祝して祈りに答えて下さいました。商売も繁盛し、家も新築――一ヶ月の売出し期間は何が何でも働きましたが、一番大切なこと（礼拝）は、その間、抜きになってしまいました。

河本さんの若奥様からの電話です。天国に行かれたおばあちゃんが代わられました。「英子ちゃん、教会にも来ないで何をしているのかね。神様ぬきで働いて――今にろくな事はない。つけは必ず来るからね。教会に出なさいッ！」とお電話を下さいました。お客が日曜日になると朝から来るので、この一ヶ月間どうする事も出来ません。すんだら日曜日には必ず……と言い訳をしていました。

売出し期間がすぎて、自動車で私と主人で得意先廻りをしていました。さて、今日も一つ門司方面（門司方面は親戚もあり、非常によいお得意さんばかり）に行って商売をしましょうか……と外に出ましたところ、郵便配達が手紙を配って来ました。榎本先生からです。すぐ開封して読ませていただきました。先生のお手紙と活水誌を入れて下さっておられました。

「よく聞きなさい。『きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一ヶ年滞在し、商売をして一もうけしよう』と言う者たちよ。あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ――（ヤコブ四・一三―一五）」と言う聖言の御説教だったのです。先生から見られているようです。ハッと我にかえり、「あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思い見よ。」（イザヤ五一・一）私は涙が出て、主におわびの祈りと悔改めを致しました。

◆それから数年、順調にまいりましたが、ボッボッ和服が行きわたり敬遠されだしたのです。あまり売れなくなってしまいました。忙しさも半減しましたが、体に余裕が出来、戸畑教会が与えられて、水曜、金曜にも集会に出させていただける幸いな身となりました。でもよく人が来たり、思う時間に電車に乗れません。どうしても集会に出たいので、遠方ですからハイヤーを使うこともしばしばでした。

榎本先生にお会いした時、お話をしました。「榎本先生、私は、早く腰ひきからげて用意をするのですが、来客や、まだ分らない畠山の事などで教会がおそくなります。贅沢で経済観念がないと思われるのですが、教会に行きたいのでハイヤーをつかいます。でも主の所に行かせていただきますので平気です」。先生は「ハイヤーを使ってもよろしい。主に『ハイヤー代を下さい、なくなりましたから』と祈りなさい」――先生は全く神様によりすがっておられ、私に教えて下さいました。

◆三二歳で行商をはじめ、今年ではや六六歳になりました。も

う年をとって来て、物忘れもはげしく、あちこちが痛んだり、働きもにぶくなって来ました。それに商売もなかなかふるいません。でも神様は、一ヶ月の生活はちゃんと与えて下さいます。感謝です。

とても先の事を考え不安になり心に祈りました。「神、主よ、どうか教会へ間に合うように交通費を下さい」――雨の降る日でした。長男が、「お母さん、社会保険（事務所）に行ってみよう」と申します。実は野村奥様が教えて下さったのです。「自分は、働いた時のが、今いただけたから行ってごらん」――私はいただける筈もありません。河本さんのお宅にお世話になり、食べさせていただき、着せていただいたのですから。また、社会保険の年金などサラリーマンさんのいただくもので、私は考えてもみなかったことですから。

でも八幡の社会保険事務所に行ってお話してみました。調べていただき申請書を書きましたところが、係の方が古い台帳を出されて、「畠山さん、あなたのは、ほぼ間違っていません。二三年から二七年三月までです」と見せて下さいました。何という感謝でしょう。神様は私の老後の事をお考えになっておられて備えて下さっていました。何という感謝でしょう。河本様はこのような働きのない者まで、社会保険に入れて下さっていたのです。おまけに私のすぐ近所、曽根に社会保険支所が出来ました。国から知らせが来たらそこへ行きなさいとのことです。手続きを持って自転車で行きました。係の方が、「畠山英子さん、全国で同姓同名の（保険を受ける）人が十人います。あなたは七人目です。一時金を受け取っていないので五年間分が一括して入ります。あとは月々です」「何ヶ月程頂けるのでございますか？」「年金ですから一生、元気で行ける限り、死ぬまでです」――私はボーッとなりました。「主よ、ありがとうございました」二日前に祈った教会の交通費、祈りに答えて下さいました。

五〇円しかなかった教会の交通費を、主は祝して下さいまして、贅沢な程のハイヤーを使わせていただきました。そして今後も特別交通費を、私の教会へ行ける限り与えて下さいました。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。」

（エレミヤ三一・三）

主よ、感謝致します。榎本先生、有り難うございます。伊規須先生は、私が常に言いたい事を言い、年をとりましてもオッチョコチョイの私の為に、いつも祈って下さっています――。すべてが感謝です。

すぎなの話

岩井　芙美子

むかし、むかしのその昔、椎の木林のすぐ側に
小さいお山があったとさ、あったとさ
丸々坊主のはげ山は、いつでも皆の笑い者
これこれすぎの子　起きなさい
お陽さま　にこにこ声かけた　声かけた。

ただ目の前の事に流されていた頃、ほのぼのとした楽しさを心にもたされたこの歌でした。

「気持いいな。ここからは日本一のびわ湖が眼の前に見え、右手には扇の要のような近江舞子、まだ南の入口に過ぎないと聞いているけど、湖の向うはそのまま空につながっているよう。さっきから一寸雨が降りそうだと思って、ふと目をあげて僕は驚いた。何と、向うには山々が連なっているではないか。アッ、あれは近江富士、神様はなんと素晴らしい方なのだろう。一日のうちに景色を次々に変える事ができるのだから」。ひとり言を言いながら、すぎなはここがすっかり気に入って皆いました。

「ここはわたしの天下だ。もうここにしっかりと根をおろして、終日湖を眺めながら僕の家族と楽しく過すのだ」と。いつしか一緒になったお友達もどんどん殖えて、すぎなの背丈よりも何倍にもなってきました。すぎなは一寸悲しくなりました。後を見ると比良の山が高くせまり、四月も中ばと言うのにまだ頂きに雪が残っています。「ウワー寒い。ブルブル」。それでもすぎなは、頑張って根を深く深くおろしていきました。山からは鶯も降りてきました。トンビは「ピーヒョロロピーヒョロロ」と空を回っています。ある日突然、キジの親子が飛んで来て頭をふみつけてゆきました。恐ろしい蛇がやってきて、首を高くもたげた時はびっくりしました。きっとまむしです。あの時は、ケロケロと鳴いていた蛙の声がピタリとやみました。

そんなある日、ここの地主さんがこの山を住宅地として分譲しはじめたのでした。みるみるうちに、奇麗な家が建てこんできました。そしてとうとう、すぎなが精一杯楽しんでいた所にも、家が建つ事になったのです。地は深く掘られました。眠っていたすぎなはビックリしました。見ると、回りのすすきの根っこや、大きな松の木までも倒されて、ブルドーザで持って行かれているではありませんか。

やがて家が建て上って、親子連れ五人が引越してきました。幼稚園に行っている女の子とその妹、一番下の男の子はまだ小さくて、ピーピー泣く声があたりかまわずひびきます。

この月は雨がジャンジャン降りました。お父さんが出てきて、雨の中で一生懸命シャベルで水の道を造りました。ここの土は粘土で、水がたまると逃げ道がないのです。女の子は大喜びで、傘をさしてお手伝いをしました。ひと苦労しましたが、水は流れて回りの排水溝から山を下ってびわ湖に流れてゆきました。靴もズボンも泥んこでビチャビチャです。奇麗好きのお母さんは、毎日洗タクと靴洗いに大変です。

外回りの工事の人がきて、通りからくだる階段から玄関まで敷石が敷かれ、家の回りはレンガで囲み、小石が置かれました。庭の端っこには小さな花壇もできて、真赤なビロード色したバラも一輪咲きました。その度に、地面一杯に広がっていたすぎなは、兄弟を失いました。

一年たった四月、おじいちゃんとおばあちゃんが遊びにやってきました。翌朝早く、おばあちゃんは早速庭に出てきました。「まあ嬉しい、まだつくしが残っていたよ」。すぎなは「少しはお役に立ってよかった」と嬉しくて、するがままにさせておきました。それは、その日の夕食と翌日のお弁当のおかずにと、卵でとじられておりました。

するとどうでしょうか。翌日から、おばあちゃんは、朝に夕にとすぎなを引っこ抜いてゆくのです。「まあしつこいのね。昨日取った所からまた出ている」。それはそれは、全く容赦なく、一つ残らず引っこ抜いてゆくのです。ついには、四つ鍬を持ってきて地面を掘り出したのです。すぎなの根は、丁度黒いストローです。しかも、二〇㎝間隔に二つづつの黒い玉がくっついているのです。鍬をあてると、バラバラと音を立て引きあげられてきます。鍬の歯を免れた根っ子は、地深くに喰い込んでいて、とてもおばあちゃんの手に負えるものではありません。けれども、残しておけば玉から芽が出て、またどんどん殖える事確実です。

「もともと此処は僕たちの住んでいた所ではないか。お前たちは他所から来て僕たちにどうしろと言うのか」。

ふと、おばあちゃんにそんな声が聞こえました。それはまさしく天の声でした。ハッと気のついた時、おばあちゃんは我に帰りました。

もともと住むべき者でなかったのに、神様の憐みで住まわせていただくようになったのです。

「もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。神の慈愛と峻厳とを見よ」。

それから、おばあちゃんの顔は変わりました。自分が救われた時の事を思い起こして、おばあちゃんは涙が出そうになりました。「ゴメンネ」。すぎなは嬉しくなりました。すぎなは、他の草よりもまさってやさしく美しくお行儀がよく可愛いので

す。けれども、ほっておくわけにはゆきません。「ゴメンネ」と言いながら引っこ抜いていたおばあちゃんは、だんだんと分ってきました。あの黒い頑強な根っこに鍬を入れられてバラバラになりながら、尚も奥深くその根を延ばして子孫を増やそうとしている。これはそのまま、イエス様を知らなかったわたしたちであったと、おばあちゃんは、もう一度新しく自分をうつし出して見たのでした。家の回りの石地から出たすぎなは、ヒョロヒョロとして元気がありませんでした。一度掘りかえして砂をまぜた所の地から出るすぎなは、太いのが次々と吹いて来るのです。そっと鍑の先で回りから当てると、元から切れた根がするりとついてきて、当分は大丈夫と思うのですが、したたか者のすぎなは、その脇に明日を待っている薄桃色の坊主頭が隊列を組んでいるのでした。つみ取ったすぎなや根っこは、陽に干して焼かれてしまいました。そして、その灰は花壇にかえされました。一ヶ月がまたたく間に過ぎて、おじいちゃんとおばあちゃんは名残り惜しげに帰ってゆきましたが、その朝も小石をかき分けかき分けして、手は休めることがありませんでした。

梅雨がきて、また暑い夏もやってきます。すぎなは、明日もどこかで、「おはよう」と嬉しそうに首をもたげて出て来ることでしょう。「お互いに光を一杯あびて元気を出そうね」。神様もまた天から惜しまない憐みを贈って下さるに違いありません。この家に引越してきたその日、雨がやんだ束の間に、びわ湖にきれいな虹が空一杯に広がったことを、すぎなも一緒に見たのです。神様とこの家に住む人たちとすぎなの語り合いは、これからもずっと続き、広がってゆくことでしょう。

「神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう。しかし彼らも、不信仰を続けなければ、つながれるであろう。

神には彼らを再びつぐ力がある」と。

栄光がとこしえに神にありますように

アァメン

（編者注。この五人家族は岩井茂樹さんのご家族です）

小さい小さい勇気を出して

「エス様お早うご座います」

ぶどうの木の枝に新芽となって

大田　敏夫

朝六時、ベルとローラを連れて散歩に出掛けます。なるべく人通りの少ない京良城池の堤の小道を通って三〇分。

「お早うご座います」。行き違った初めての人から声をかけられました。

「ハッ！」……「お早うご座います」

先手を打たれて、私は一瞬何となく負け犬の様な気遅れを覚えました。過ぎ去る人の姿が何と大きく見えることか。散歩から帰って、塀の外を掃除することにしています。道路に吸い殻が毎日一〇個位転がっている。畜生！、これだから煙草吸いは好かん！、ブツブツ言いながらの朝のスタート。

これではいかんなー？。

次の朝から勇気を出して、すれ違う皆さんにこちらから先手を打って、「お早うご座います」と挨拶をすることにしました。若い人には小さな声で、お年寄りには大きな声で。たまには、ソッポを向いて行き過ぎる人もありますが、殆どの人からは笑顔の会釈が返ってきます。清々しい朝の一歩が初まります。段々と朝の友達も増えてきます。

「可愛い犬ですね」ワン公達も褒められる様になりました。

見知らぬ人に朝の挨拶をする。してもしなくても良い、何でもない様なことですが、とても楽しい気分を味わえることを知りました。しかし、それにはやはり一寸した小さな勇気のいることでした。

長い間、私はイエス様の横をただ頭を一寸下げるだけで通り過ぎて来ました。そーっと、時々振り返りながら。臆病だったのです。

「求めよさらば与えられん」よしー！、勇気を出して見ましょう。

そしてこの度、皆様のお祈りのお陰で、やっと弱い私にも小さな勇気が与えられ、「イエス様、お早うご座います」と口を開いて御挨拶が出来る様になりました。すると世の中がパッと明るくなってきました。イエス様本当に有難う御座います。これからは、道に転がっている煙草の吸い殻にも、「今朝も喜んで掃除をさせて貰うよ」といえる様になりたいものです。お導き下さい。

受洗とパーソナル無線

緒方昌隆

一九九〇年五月一三日（日）に受洗して、一年になりました。私も、こんな人間（気が短く、足も短い）ですけれど、受洗して自信がつきました。四月に仕事上の事で失敗しましたが、神様から支えていただきました。

仕事は現在、大阪まで走っています。

二月二三日の夜、家内と一緒に仕事で、鹿児島北営業所に行きました。えびの料金所から鹿児島北まで、白い粉（小雪）がサラサラ降る中をトラックで行きました。二三ヶ所もあるトンネルを通り、加久藤峠を通り、えびののパーキング（無線用語で、「P子ちゃん」と言います）に、行きました。峠を通る時は危険なのですが、神様から守ってもらいました。

近頃、凝っている事は、パーソナル無線です。パーソナル無線は、とてもむつかしいです。道路情報が知りたくて、付けました。家にも、ダイヤモンド固定しています。それは、友人から借りた物ですが、あとは家内の許しを得て買いました。パーソナル無線には、色々な連合会があります。うまくなってから、入りたいと思っています。無線の呼び名は、「吉本興業のタコちゃん」と、言います。よろしくね！

戸畑教会に導びかれて

「感　謝」

内田松枝

私は、昭和五年から約四年間、詩人北原白秋を生んだ柳川の地で育ちました。柳川は、かつては立花藩の小さな城下町。その頃は、まだ武家屋敷群が点在し、その一ヶ所に広大な敷地を持った家老屋敷があり、隣に小さな教会がありました。尖った屋根の上に十字架が掲げられた独特の建物は、周囲の環境からは全く異質のものを感じました。幼かった私はおとぎの国を見るように、好奇の目で見たものでした。教会の扉はいつも堅く締ったままで人の気配もなく、そして、一度もこの扉の開かれたのを見ることもなく柳川の地を去りました。

あれから半世紀もとっくに過ぎた昭和六二年一月、聖徒でもない私の家庭に、神様は突然恵みの扉を大きくお開き下さいました。

それは、私の次女の結婚式によって導びき入れて下さったのです。

美しい川の流れ、幼友達、城下町独自の行事等々……。心の故郷、懐かしい柳川の記憶が薄れゆく中で、あの小さな教会の情景だけが、不思議に脳裏に焼き付いていました。

柳川時代から、いや私が生まれる前から既に、神様の恵みのご計画のみ手の中に居らせていただいていた私だったのです。

誠に神様の憐みは深く、ご慈愛によって顧りみていただいていた事を、畏れ感謝せずには居られません。

早速、私は戸畑教会の一員に加えていただきました。長い間、家業の手伝いに追われ、読書から遠ざかっていましたし、その上、眼疾から来る頭痛に悩まされて、思うように聖書に親しめず、心身共に苦しい日々でした。

『キリスト、イエスは罪人を救うためにこの世に来て下さった』

なきに等しい私、罪深い私を、神様は、敢えて召し選んで下さいました厳かな現実。苦しくても、後へ引き下ることは出来ませんでしたが、無知なるが故に、教会の中で失敗を重ねたり、求道とは名ばかり、形ばかりの軽薄なものであったと思います。

不安定な心の状態ではありましたが、伊規須先生のお説教を拝聴しては涙を流し、穢れた心も少しずつ涙で洗い清められ、安定して行ったのでした。

求道も既に二年半を過ぎる頃、生ぬるい信仰に焦りを感じ始め、自問自答する毎日が続きました。

『行けあなたの信仰があなたを救った。』

行け!! 優柔不断な私に神様のご命令が降りました。

平成二年五月一三日　晴　午後受洗

待ち望んだ日を遂に迎えることが出来ました。緊張の朝を迎え、ご聖日礼拝の後、式場に臨ませていただきました。

式場である谷川は美しい緑の木々に覆われ、枝に絡まった薄紫の藤の花が、あたりの風情を一層醸し出し、快晴のもと、多くの聖徒方の上にも、神様の祝福が照り輝いて来るような厳かで身の引き締まるひと時でした。

『わたしの愛のうちにいなさい』(ヨハネ一五・九)

もう一つの世界に新しく生まれ変わらせていただき、希望と、愛と、信仰の生涯へ導びき入れて下さいました。

『人は何者なので、これをみ心に止められるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか』

※何故私のような者をお選び下さったのでしょう。

人の常識とは違う、荘大で神秘的な神様のご慈愛。ただ神様に喜ばれる信仰の継続によってのみ、お答え下さるのでしょう。

言い尽せない感謝。別の自分がそこに居るような、不思議な

感動を覚えました。

『神様!!』

※私にどのようなご使命をお与え下さるのでしょうか。

※私に何が出来るのでございましょうか。

『あなたは　私に従って来なさい』

（ヨハネ二一・二二）

横浜に転居していました娘も、私より一週間遅れのご聖日に受洗させていただき、我が家はお恵に輝き、この上ない喜びに浸りました。

私の記憶力、思考力、注意力、体力、総てが減退して老いを感じる頃、神様に目を止めていただき教会に導びかれた訳ですが、既に、一〇年、二〇年、又、生まれながらのクリスチャンであられ、外から見れば模範家庭、内にあっては神様の恵み豊かなご家庭、他人に対しては優しく謙遜であり、又、親子、兄弟関係の麗わしさを垣間見ます時に、私も、もっと早く神様の子供としていただきたかった…。

でも今は違うのです。残り少ない命しかない私を、このような素晴らしい身分としてお用い下さる今が恵みの時、与えられた時が最高の幸せであることを悟らせていただきました。

暗い時代背景もあって、人生幾山河を経て来た今、生まれて来てよかった。生きていてよかった。

神様の、限りないご愛といつくしみによってご支配下さった私の人生を、心から感謝し、賛美するのでございます。

恵みの中にも緊張した日々を送り、受洗して早一年がめぐり来ました。未だお祈りもおぼつかない状態でお羞かしく、神様とのお交わりの少ないことを反省しております。

「お祈りの出来ない人は、ひたすら祈ることです」と伊規須先生に励まされています。

『神様は生きておられます』

信仰の浅い私に、渇きを与え、神様におすがりさせていただき、尊い十字架の御血によって開かれた道を、揺ぎない信仰をもって歩ませていただきたいと、切に願うのでございます。

神様、イエス様、ありがとうございました。暖かくお支え下さいました、伊規須先生ご夫妻、戸畑教会の皆様方、ありがとうございます。

私の総ては「感謝」、この言葉に尽きるのでございます。

いくとせの穢の中より幼な児の
ただ主にすがらんと
血を仰ぎ見つ　　受洗

み言葉を悟りて肉なる我を悔い
涙ながせし
赤線のあと　　聖書

ひとひらの花にふれたる指先に
ああ　神のいとなみ
伝わるが如し　　献花

「主イエスを信じなさい。そうしたら あなたもあなたの家族も救われます。」

熊谷　千代子

主人の生まれた植木の町はお寺が多く、外にも何々様といった偶像が沢山有り、偶像崇拝の町でした。

そこで育った主人は、私が直方の天幕伝道に行き、つづけて教会に行くのに腹を立て、主人の両親の住む近くに移転させられました。一方、教会ではお祈り下さって、分り易い読物や本等をお送り下さって力をつけていただきました。

この様な生活が数年経った頃から、戦争の噂を聞くようになりました。戦争の話は余りにも悲しい事ばかりなので、カット致します。敗戦から立直った日本は、だんだんと豊かになり、子供達も成長し、それぞれ職も与えられました。直方教会は、戦争のため人数が少なくなり飯塚教会と一つになり、ますます遠くなりました。その頃、私の友達で信仰あつい野副さんが一時直方に来られ、すばらしい信仰の証しをされ、子供たちも進んで教会に行くようになり、洗礼も受けました。わが家の子供は女ばかり四人で、長女、次女と結婚をし、三女の百合子が信仰篤い正野家に嫁ぎました。

「主イエスを信じなさい。そうしたらあなたもあなたの家族も救われます」

この聖言は真実であり、私の神は生き給うお方で、小さな者のいのりをもお聞き下さる方であることを知らされ感謝致しました。

私達は、五九年頃より前田教会に導かれました。主人はなかなか信ずることはできないようでしたが、お祈りだけは一生懸命しておりました。年齢的にも色々な病気が出てきまして、教会は私だけにし、その代わり、日曜毎に正野さんが来て聖書のお話をし、お祈りをしてくれました。

この様な日々が三・四年つづきました。そして、昨年の夏は特別に暑い日が続き、九月の中ば頃も暑さは衰えませんでした。

九月一四日に、足が痛いと言いますので、病院に連れて行き、みてもらいますと、関節に水が溜っていたので、取っていただきました。翌朝は反対の足がとても痛いといい、針を差し込んでも水はないと先生は言われ、夜は私が一人ですので、おむつ替えが大変だと心配して下さり、大手町病院に入院致しました。翌朝、病院に行きますと整形外科から内科に替っています。どうしたのですかと尋ねますと、肺炎を併発しているとの事で、びっくりしました。看護婦さんが、この病院は完全看護ですので夜はお帰り下さいと知らせて下さいました。

二週間過ぎた頃、主人はいつもにない真剣な顔をして私に「ありがとう」と言ってくれました。今まで一度もこのようなことを言ったことがありませんので、私は、「はっ」として、もう一度顔を見直そうとした時、看護婦さんが来られて、たんを取ったり寝巻着を着替えさせたりなさるので、何とも言えなくなりました。顔を見ますと平安な顔でした。しかし、これからが大変でした。先生がこられ説明されますには、入院時の菌はすでに死んだが、その後にできた菌はなかなか死なず多くなった。自分達も研究しているがなかなか撲滅しないと。正野の真宏さんもよく来てお祈りし、榎本先生も来て下さり、又百合子も来て、理解できるかどうか分らないが耳元に口をつけて、お祈りし、聖言を語ってくれました。

私は、ただただ、主よお助け下さいとお祈りしました。危篤の状態がつづき、一〇月二一日に八三才の生涯を閉じ天に召されました。

その後、榎本先生に「有難う」の事をお聞きしましたら、皆さんのお祈りにより、分らなかった霊のことが分って「有難う」の言葉が出たのです、と言われ、本当に奇しきみ恵みにただただ感謝致しました。

「あなたが私を選んだのではなく私があなたを選んだのである」

主のものとされたさいわい

高木　ツルヱ

昭和六三年五月、主人が悪性リンパ腫瘍と診断されて以来、神様の変わらない御愛と御真実のゆえに、今に至るまで守っていただいて感謝いたします。

その間、胆のう炎、肝臓障害や感染症による口内炎などで入退院を繰り返し、不安にとりかこまれた時もありましたが、

「民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。そのみ前にあなたが

たの心を注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。」（詩六二・八）の聖言に信頼してお祈りしますと、神の平安と希望が与えられました。

去年の三月下旬、主人がヘルペス（帯状ほうしん）という、胸部の右半分に激痛を伴う病気にかかり、麻酔科で「神経ブロック」という治療を受け、こんにちに至っています。今は当初のようなはげしい痛みはなくなりましたが、痛みは続き、格別天候不順の日は痛みがひどいようです。

最近、薬の副作用のため主人の視力が急に落ち、テレビの字幕が見えにくくなり、眼科に行って検査してもらったところ、白内症がだいぶん進行していると言われ、治療に通っています。いまは大形聖書の字も見えにくくなって、専らお祈りと説教テープを聞いている毎日です。さらに、薬害のせいか、歯がぐらぐらになり一五本抜きました。

見えるところはこのような状態ですが、主人は神様の限りない御愛と聖言を信じ、すべてを主にゆだね、霊感賦一〇一番「エホバはわが牧者なり」や、聖歌五二一番「キリストにはかえられません」を心から讃美しています。私はこのような主人の信仰を見て、主イエス様の御血の故に神様から罪を赦され、永遠の命にあずかった者は、どんな中にあっても勝利であることを学ばせていただきました。

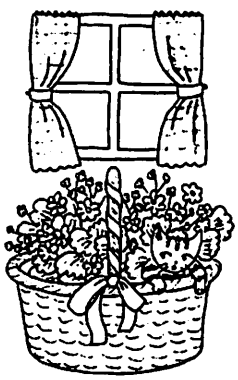
いま、わたしたちは、共にいて下さる主イエス様に目を注ぎ、耳を傾けつつ、主のみ旨にかなった信仰生涯を全うさせていただきたいと切に願います。

わたしたちが、このように毎日を平安に過すことのできますのも、神様のあわれみと、榎本先生御夫妻をはじめ多くの兄弟姉妹のあつき祈りがあることを覚え、心から感謝いたします。

「わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。」

（ローマ一四・八）

平成三年六月九日



愛犬物語

緒方　とみ子

「死」というものは、突然に来るものだと思っていた私ですが、死に至るまでの過程があったなどと、知識のない私達にはわからないものでした。すでに、柴犬のまじった二匹の雄犬を飼っていますが、狭い団地の中での飼い方も、周囲の理解がなければとてもむつかしく、いつも問題を残してくれました。

主人の犬気違いを知っている中学の同級生がくれた純柴犬は、器量も良く毛並もきれいで、珍しい（四本とも白足袋をはいた様な足）犬でした。「ネコ（雌犬）」と言う名前は、私と北九州にいる姪達との話から名付けられたものですが、主人は、娘の様に可愛がり、雪の降る寒い日も、雨の日も、仕事で疲労気味であろうと、散歩に連れて行ったりして、本当に自慢の一つでした。「親元から離れて間がないから寒いだろう」と、戸畑教会の伊規須牧師より、アンカ（こたつ）を借りて来ては、小屋に入れてやったり、座敷に上げては、ふところに入れたり、おまけにとても寒がりで、「本当に、猫じゃないの？」と、私が犬の顔をまじまじと見たものです。そして団地や畦道を走っていると、「可愛いいね。ぬいぐるみの様ですね」と、声をかけられ、私も自転車で一緒に走るのが日課でした。三日おきに会う主人にとって、楽しみは、「ネコ」の成長ぶりでした。大きくなるにしたがい、いたずら盛りで、庭にある植木や花達はいつもメチャクチャでしたが、犬が生き甲斐の主人にとっては、怒る言葉も甘いものでした。

亡くなった日は、いつもと変わらずに元気で、庭を飛び回ったりしていました。主人が夕方会社に出掛けた後、そして息子もまだ帰宅して居ない夜半、苦しんでいるのを手当する事もわからず、本当に二時間余りの急な出来事で、私が気付いた時は、腰も立たない程のふるえと下痢症状におそわれ、見るに忍びない姿でした。だけど、なぜだか「死」というものを私は考えていませんでしたので、本当に急でした。そして死んだ後で、私達は、「ネコ」の異常に気付きました。それは数日前に、「ネコ」の鼻が乾いていた事と、大きな細い糸ミミズの様な虫が出て来た事でしたが、私達は以前の犬の虫下しを飲ませて、安心していたのです。まさか、蚊から介するフィラリア症（犬糸状虫症）という病気であり、血統書付きの犬は弱く、雑種の方が強いなどと、思っても見ません。その病気は犬だけではなく、まれに人にも感染する事があるそうです。そんな病気になっていたとは知らずに、最後の日も、元気な姿を見せてくれた「ネコ」でした。仕事で遠方に行っても、犬の事が気がかりで、よ

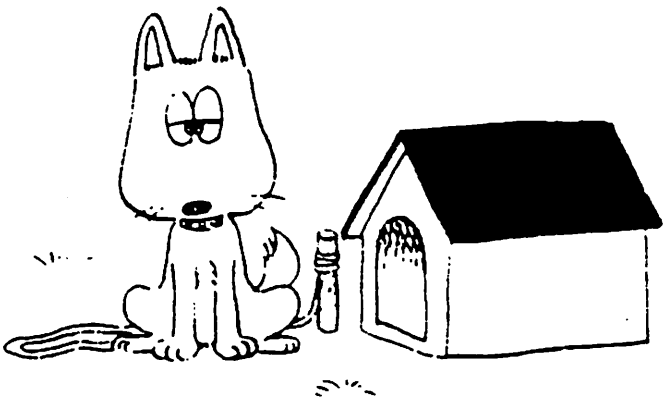
く電話をくれた主人でしたが、一番「ネコ」を愛していた丈に、何度も埋めた場所に行っては泣き、礼拝で好きになったという讃美歌（六六番）を歌ったそうです。そして、会社を休んでまで、悲しみ嘆きました。しかし、なにが幸いになるのか本当にわかりません。愛犬の死によって、神様に近づく機会（主人のバプテスマ準備会）も与えられ、「神様を、私達が悲しませない様に」と、教えられました。この物語も、ここで終りになると私は思ってましたが、「あれ程ショックで、友達に申し訳がない、悲しかった事はなかった。しばらくは飼わない」、と言っていた主人は、二ヶ月後に、凝りもせず、今度は秋田犬を買いました。勿論、酒をひかえて、なるべく世話をすると言う条件付きでした。高価な買物に私は不満でしたが、私も以前、馬鹿な事をした経験が有るから、人の事は責められず世話をしています。『一九九〇年聖会記録』（伊規須太郎著）で教えられた様に、「人間は何かに預け尽くして行かなければ、生きられない存在である」と言う。信仰の足跡を残して行った亡父も、私達姉妹が、臭いからと言うのも聞かずに、好きだった鶏を沢山飼って楽しんでいて、近所の人達から、「本職は、豆腐屋か養鶏場かわからないね」と。そんな亡父も主人も、良く似ているタイプだと、つくづく思いました。そして、柴犬に比べて、秋田犬は本当におとなしく、団地の犬には最適だと思ったのも束の間、来た時から胃腸虚弱で、病院通いです。主人は、又もや死ぬのではないかと不安がり、早速知人の病院に連れて行き、エサの与え方などの指導を得ました。そして、感謝な事に、遠方から来ているとの事で、大変良くしてもらっていますから、日増しに成長し、生後七〇日目で体重も四キログラムになりました。しかし、とても個性が強く、気分屋の「かな」です。言葉が通じないから私の仕事は増すばかり。コンクリート（団地内）は歩かず、畑や庭は好きで、しつけも大変、手がいります。しかし感謝な事に、朝早く六時に起こしてくれ、神様と交わる機会も多くなりました。主人の健康管理と、犬の体調を見ながら、食事の用意をしている私は、ほとほと疲れますが、大きくなって、「吉ノ真紗号（「かな」の本名）」という名前に負けない様に、良い番犬になって欲しいと、息子よりも期待してます。そして、最初の約束通りに、主人は、良く世話をします。仕事先で運転をしながら、あのバナナ売りがぴったりする様な低音の声で、「聖なる、聖なる、聖なるかな」と讃美しては、「かな」を思い出すそうです。そして、「かな」の為に、早く帰って来る様になりました。

（アルバム抄）

この証を書いて、一年余りになりました。私達は、散歩がてらに、「ネコ」が眠っている旧陣屋川沿いの丘に、「かな」を連

れて行きます。「かな」は、生後一年一ヶ月、体重二三kg。久留米犬友クラブCH展のチャンピオンシップショーにて、ベスト・オブ・ブリード賞をもらいました。残念ながら、チャンピオンにはなれませんでしたが、増々大きくなりつゝ有ります。

（わんわん日記より）



主の御手にい抱かれた病院生活

藤掛邦次

（その一）

恐れるな、わたしはあなたをあがなった。
わたしはあなたの名を呼んだ、
あなたはわたしのものだ。
（イザヤ四三・一）

二月二日会社の若い者の結婚式の仲人役を、糸島郡前原町で務めさせていただきました。

二月三日家族の皆んなで教会に出席、日曜礼拝を捧げさせていただき、大へん恵まれて感謝の内に、迎えます週間の希望と忍耐を主にお誓い申し上げて、帰していただきました。

明けて二月四日一六時頃、会社を出て帰宅しようと、大濠バス停迄来ました。その時突然に、今迄かつて味わった事のない強い悪寒に襲われました。少し寒かったので、風邪かなと思いましたが、余りの悪寒の強さに、少し気になりました。ガタガタと体が震えて来ますので、襟巻きと外套にしっかり身をくるみ乍ら、タクシーを待ったのでありますが、いつも良く通るタクシーが、今日に限ってなかなか来ません。丁度その時、家の

方に帰るバスが来ましたので、少しでも風を避ける思いで、そのバスに飛び乗りました。

バスの中で何とも熱が高くなるのを感じて、まず神様にお祈りを致しました。

神様こんな状態になりました、どうぞお許し下さい。この状態はどんな事でしょうか、唯の風邪でしょうか、それとも何か悪かったでしょうかと、反省しきりにバスにゆられて、帰りました。私も、私の家族も、何か事が起これば、すぐその場で神様にお祈りし、そして聖言をいただくのを常の事にしていますので、バスの中で、神様どうぞ私に聖言を下さい。聖言をいただき度いと切にお祈り致しました。今日迄その時々に頂戴します聖言によって、物事全てを進めて参るのが常でありました。

神様この様な急な出来事によって、私にどんな事を教えお示しなさろうとしていらっしゃるのですかと御旨を伺って、お言葉を下さいと申し上げて居ります内に、バスは片江一丁目に着きました。あゝ可成りの熱が出て来たなと、バスを降りてすぐ近くに小さい樋井川に掛った橋がありますが、ヨタヨタとその橋を渡り終った途端にお与えいただいたのが、最初に掲げた聖言であります。

足が地に着かない状態で外套にくるまり、ガクガクする足で一足一足歩き乍ら、恐れるなわたしはあなたをあがなった、わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ、と聖言が私に迫って来たのであります。心の中で、こんな時に少し違った聖言かな、と一瞬頭を横切ったのでありますが、神様、有難度うございます。この聖言を頂戴しますとお答えし乍ら、家に帰り着いたのであります。

帰り着きましたらもう駄目、バタンキュウ。熱は高くなるし、体を休めるも身の置き処もない位でありました。床に入り頭を冷やし、風邪位だろうし、すぐ熱も下がるだろうと、簡単に思っていました。すぐに父が来て、手を置いて祈ってくれました。小さい時から父が手を置いて祈ってくれますと、いつも癒されていた私でした。父は、『「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で生きる。（ホセア六・一―二）」、神様体を無理した処はどうぞお許し下さい、わたしたちをかき裂かれたがまたいやして下さると御約束ですから有難度く感謝致します、さあわたしたちは主に帰ろう、立ち帰って信頼するお方のあることを、この度も邦次が教えられ、深く主を思う時を与えて下さいます様に、主の御名に依ってお祈り致しますアーメン』と祈ってくれました。

二月五日、六日と過ぎて行きました。三八度、三九度の熱が続いて、水やジュースを飲む丈で、どうにもならない状態で、どうしてこんなになったのか、余りの急な事で、わかりませんでした。体を休めても一向に高い熱が引く気配すらなく、唯うとうとするばかり、とうとう七日の日に、六本松の志々目先生に往診を依頼することにしました。先生も風邪位に思われたのでしょう、下熱剤と栄養剤を注射して「お大事に」と、帰って行かれました。少し落ち着いた感じではありました。

二月八日、どうしても熱も下らない、体もおさまりそうにない、今一度先生に往診をしていただく事にしました。その頃少し胸が詰った感じで、時々息苦しい時がありました。

志々目先生が来られて診察を受けました。先生が「これは普通の熱ではない、何かおかしいですね」、と言い乍らうつぶせになってと言われ、うつぶせになって聴診器を胸のうしろに何度も何度も当てゝおられましたが、「ラッセル音が強く聞こえます。熱も体力の衰えも全てがこゝに原因が有る様です。この音が本当にそうであれば、私の手に負えるものではないですね。一度病院で診察を受けて見て下さい」、と病院を紹介して下さいました。国立南福岡病院副院長井上先生を紹介いただき、添書を付けて下さって、診察を受けることに成りました。

この日、榎本和義先生にお電話を致しまして、「こんな状態です。どうぞお祈りしてやって下さいませ」、とお願い致しました。そして、明日九日が井上先生の外来診察日ですので診察に参りますと申し上げましたら、私の車でとおっしゃっていただき、甘えて送っていただく事に致しました。

二月九日、先生の御車で病院に参りました。御多忙な中に、わざわざ本当に相済みませんと、乗せていただき、病院迄送っていただきました。

待合室で待っている間も、体がだるく、食事も入っていないので、ぐったりとベンチに横になってしまう有様でした。

井上先生の診断を受けました。その結果、第一声が、「入院していただかなくてはならないでしょう、今日はベッドが空いておりませんので、一一日の日に一つ空きますから、一二日入院覚悟で準備して来て下さい」、と言われました。体もメロメロに成って居りましたし、先生のお話しも聞く丈で、お話し自体の事を思考する力もありませんでした。それに、今だに病院生活を一度もした事のない私でしたので、入院覚悟での言葉は、唯事でない事丈は察知しました。しかし体がどうにもならず、物を言うのもおっくうになっていました。家に帰り又床に入りましたが、相変わらず三八度三九度の熱は下がろうとしません。毎日父の祈りをいただいて、二月一〇日、一一日と過ぎて行きました。二月一二日朝、入院準備して浩文の車で送ってもらっ

たのが運の尽き、とうとう入院生活に入りました。

二月一二日入院、入院早々色々な検査が始まりました。まず血液検査をし乍らですが、息苦しいので、酸素吸入をすることになりました。しかし胸の圧迫が激しく、井上先生に来ていただいて診察、明日一三日にレントゲンを撮ることにしましょうと言われました。一二日の四時頃になって、やっと落ち着いた感じになりました。家内の話しによりますと、その時のお父様、頭がぼーとしていて話しても分かっているようで分かっていない、歩けないのに歩いてトイレに行くと言い、自由にさせろと怖い顔をする、情けなかったそうです。

血液検査の結果、体内の酸素不足、五四％しかありません。常人の酸素量は一〇〇％か九五％が体内量ですので、半分しかありません。酸素マスクがはめられました。それが又苦しそうでたまらなかったとの話しであります。私は何も正確な記憶がありません。明けて二日目、二月一三日、レントゲンを取る前余り状態がひどいので、井上先生と横田先生が、一度内視鏡を入れて見ようと言う事になりました。家内はこの時程、神様が先生お二人に良き判断をお与え下さった事を感謝した事はなかったそうです。

内視鏡を鼻から入れて、先生方もビックリされたそうです。なんと、左の肺から水と血液が右の肺迄流れ込んで呼吸困難を起こし、血液に酸素が送り込めず、窒息死寸前の状態になる処迄来て居りました。そこでその水と血液とを吸引することになり、手術が一〇時頃からなされ、大きく三回に分けて吸引される事になりました。そして終ったのが一時半過ぎでした。一回目吸引し、二回目吸引され、三回目の吸引の前半、井上先生が、しっかり気を持ってと二・三度励ましていただいたのはうっすら覚えていますが、三度目位からだんだん意識が遠のいて行くのをどうする事も出来ませんでした。家内の顔、家族の顔と、色々な事が走馬燈の様に頭の中を広がって行ったのは、今だに記憶にあります。意識の中では、〝イエス様大丈夫〟〝イエス様大丈夫〟〝心配なし〟〝心配なし〟。とうとう何の不安もなく、意識がなくなりました。邦次天国行きでした。

そのあと意識が戻って気が付く迄に、ナースの方々は心電、血液の流れ、点滴、栄養剤補給、体内酸素量、脈拍、等々懸命の努力が払われていたのであります。酸素マスクが取りはずされ、鼻チューブに変わったのですが、家内は、お父様の手も足も体全体が真白になり、天国がそこ迄来ているのではないかと思ったそうであります。側に居てどんなにか耐え切れない気持ちだった事でしょう。ひたすら聖言に依りすがり、祈りに祈ってくれた事でしょうか。浩文はあとで、お父さんの葬式をどうしようか、兄ちゃんは東京だし僕一人で、祖父母と母と心配に

思ったそうであります。

二月一四日一〇時過ぎ、やっと気が付いた時、家内がそっと「気が付いたのネ」と、涙の中に一言いってくれました。二人は喜びの涙で一杯、言葉にならず、じっと手を握ったままでした。そして、二人して神様に涙の感謝を捧げたのであります。余りにも感動的で、捧げる祈りも言葉にならず、唯々イエス様有難度うございますの連続でございました。家内は夜の間も寝もやらず、じっと見守っていてくれた事でしょう。手も足も体も真白になり、唯酸素マスクで呼吸丈している私の側で、どんなに辛い思いをしていた事でしょう。祈りに祈り、私が気が付いた時に騒がずそっと、「気が付いたのネ」、こっくりとうなづく、この一言は私に取りまして、忘れる事の出来ない、家内の暖か味を感じたものでした。

ナースの武下さんが来られ、「先生、気が付かれた様ですよ」、と言われた声に、あゝこの方々にもどんなにか御迷惑をお掛けした事かと、感謝で一杯でございました。交替の時間帯で、それぞれ替わられる毎に夜通し見守って下さったナースの皆様、目と目が合う毎に、「有難度うございました」の連続の二、三日が続き、「ひどかったとよ、良かったネ」の言葉は感謝でございました。しかし、体力はあっと言うこの短い期間に衰えて、体重は減り、立つ事すら出来ない状態に迄追い込まれてしまいました。六二kgが一〇日間位で四八kg迄下がったのですから、体の方はとても通常ではありません。しかしこれからが本当の回復への正念場だと思いました。

大阪の茨木中学校に通学していた頃、茨木教会の日曜学校に妹達と行ってましたが、その玄関に入った処に聖画があり、主が子供を抱いて祝福されている聖画でした。その横に聖書の個所が文章的に書いてありました。

「イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた『幼な子らをわたしの所に来るまゝにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない』。そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。」（マルコ一〇・一三－一六）

意識の回復が与えられました時、何でこんな事が思い出されたのか、五〇年も前の事ですのにと思わされました。その時ハタと、橋を渡った時にお与えいただきました聖言が脳裏を横切ったのであります。聖言が最初に与えられた時に、心の中でこんな時に少し違った聖言かなと一瞬思った事を思い出しました。しかし神様が私にお与え下さった聖言です。頂戴して、この聖

言で祈って祈って居りました。そして、その言葉とこの聖画とがどうしてこゝで結び付くのかしらと、しきりに考えさせられていました。

わたしはあなたの名を呼んだ、あなたは私のものだ、私のものだ。こゝでやっと聖言と聖画が結び付いたのであります。

あの吸引器で三回も吸引される時も、意識がだんだんと遠くなって行く時も、意識の回復が与えられ、家内と喜びの涙で神様に感謝をささげた時も、聖画の中の子供の様に、神様は私を御手にい抱いて、こんな者を祝福していて下さったのであります。

「私のものだ」と神様の御手の中にい抱かれていさえすればそれで私は充分だ。またこれからどんな状態になるか、明日の事は判らない、しかし神様に、「私のものだ」と御手の中にい抱かれていさえすれば大丈夫、神様からの安きが与えられました。その事は誠に喜びの感謝であり、主を讃めたゝえていさえすればそれ丈でよいのだ、五〇年前の事も、お与えいただいた聖言の事も、神様は私にとって、「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。」（エレミヤ二九・一一）

と平岡さん御夫妻、正野さん御夫妻から病院でいただいた聖言であります。その聖言通り、「恐れるなわたしはあなたをあがなった、わたしはあなたの名を呼んだ、あなたは私のものだ」、と神様にお与えいただいた聖言の深さと神様の御計画の尊さと五〇年も一日の如く、聖言でお養い下さっている神様を仰ぎ見た、素晴らしい時でありました。

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんぢら喜べ」、と山本先生からいただいた聖言通り、どんなに苦しい時も、嬉し涙にて神様をたたえる時も、主にありて喜べと、文字通りの体験となって表われ、揺らぐ事の無い神様への信頼が堅くされた事は感謝でございました。そして神様が私に取っていて下さる計画の大きさと言いますか、遠大さは、五〇年も一日の如く見守られていることを知らされた感激の時でもありました。神様にお与えいただきます聖言と現実の誠に素晴らしいマッチとをお与え下さって、深く神様を崇めて感謝を捧げさせていただきました。　誠にお言葉は生きていて、私共の力の源であります。

（その二）

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、

あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」

（二・コリント四・一六－一八）

この後半は、四八年、五六年と新年聖会で榎本先生から、その年の素晴らしいメッセージとしていただいた聖言の個所であります。　手の指に、洗濯の時の洗濯バサミと同じ様にはさむ物ではさみますと、何と体内の酸素の量が判り、脈拍も判る新鋭器の有る事を知りました。体内の酸素の量が五〇％を切りますと、生命に異状が出るとの事であります。結局、（その一）でも少し書きました様に、血液に酸素が送り込めない肺臓の状態になれば、窒息死と同じであり、炭塵爆発の時の鉱内の方の生命又は水中死も全て酸素がなくなって窒息死するのであります。この事はどなたも御存知の事柄であります。

病院内の実験の中に、喘息の方が多く居られ、ほとんどといっていゝ位に酸素吸入器を添着し、外に出ても、夜眠っていても、酸素チューブ（かつては私の初期一〇日位）を使用していました。これを取りはずすことが出来ません。これは生命に係わるからです。

実験の中で、喘息だったT氏が退院することになりました。そこで体内酸素感知器で、酸素チューブを装着したまゝ数値を計り、T氏の平常の数値を知ります。その時の体内酸素量は九八％、脈拍は七三でした。そして酸素チューブをはずし、五分間丈廊下を歩いて、部屋に帰り、同じチューブを装着してその数値を取ります。T氏の場合は、その時の体内酸素量八〇％、脈拍一〇五と言う数字でした。そして、T氏が元の酸素量九八％と脈拍七三に戻るのに、どの位の時間が掛かるかを実験しました。

五分間歩いて帰り、前のデーターに戻るまでに、三分四〇秒掛かりました。少しむつかしい計算の結果、一分間に〇・三リットルの酸素が必要となることになりました。これに依ってT氏は、外にいても、家にいても、何処にいてもこれ丈の酸素がないと生命に関係あるわけです。大へんな酸素量が必要になります。そしてその酸素を補給しなければならないし、酸素は、私達にとりましても、T氏にとりましても、生命であることには違いありません。そして、家庭では圧縮酸素の大きいボンベから酸素を引き出し、道を歩く散歩のときは、車付きの引き車の小さいのに、酸素ボンベを乗せたのを引き乍ら、天神を酸素を吸い乍ら歩かねばならないのです。一生の間、この様に酸素を離すことが出来ない状態であります。

とこゝ迄は、あゝ大変な事をしなければ生命を保って行けないのだなあと思い乍ら、その夜はT氏と色々話して夜の眠りに

ついたのであります。明けて五月一三日朝、目が覚めて、床の上でまず神様の前に、私もとうとう三ヶ月になりました。こんなに元気にしていただいて、有難度うございます、と朝のお祈りを致しました。あゝ長く一緒だったT氏が今日は退院の日で、最後の朝食をいただいたら娘さんの車で帰られるのだなあと思って彼のベッドを見ましたら、酸素チューブをはめたまゝ、すやすやとまだ休んでいるではありませんか。暫くして神様は、「邦次よ、あなたには酸素の必要はないのですか。酸素は目には見えないよ、木が大きく揺れいると風があることを知り、涼しい風がホホをなでて通ってくれると、あゝ涼しいとあなたは言うが、風は目に見えないよ」と、静かに語り掛けて下さいました。この時次のお言葉を思い出させて下さいました。そして力ある声でお話し下さったのが、「わたしたちは見えるものにではなく見えないものに目を注ぐ。見えるものは（必ずなくなって行くもの失われて行くもの）一時的であり、見えないものは（あなたのお言葉は）永遠につづくのである」。神様は、全く身近な処でお言葉の尊い真の奥義を私に示して下さいました。何とおろかな私でしょう。毎日毎日お言葉にはぐくまれ、少しでもお言葉にお従いして歩かさせていただいていると思っていた私でした。常にどこに行くにも、どんな事をしていても、共にいて下さっている神様であります。それはその通りでありますが、こんなに身近で、神様からの酸素が私をつゝみ、常に酸素がそゝがれていることを深く思わされた時はありません。静かに一人感謝の時を持たせていただいたのであります。酸素は生命ですが、神様のお言葉は更に更に私の生命であることを、この出来事を通して語って下さいました。

神様、私にはあなたの酸素が豊かに必要でございますと申し上げました。

「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。」（イザヤ四一・一〇）

今度倒れて、八幡の榎本利三郎牧師が送って下さったお言葉であります。「わたしはあなたと共に居る、わたしはあなたの神である」、見えない酸素の事柄一つを通しても、お言葉の厳粛な現実と、目に見えない酸素と私共の生命、この事を考えさせられて、見えないものに目を注ぎ、神様の力強い腕の中にい抱かれ、何の不安もなく、神様と共に幸せな病院生活の出来ました事を心より感謝し、深く神様のいつくしみとお取扱いの計画の遠大さを知り、今後の生涯に於いて、如何なる事が起こって来ましょうと、「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。」

（詩二三・四）（大濠の榎本和義牧師からいただきました、今度のお言葉です）、神様からお与えいただきますお言葉の酸素を充分に吸って、大胆に神様にお従いして行ける勇気をお与えいただきまして感謝でございました。

「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。そういうわけだから、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。」　（二・コリント五・七―九）

目に見えないものでわたし共が生かされているのが、一〇〇％であることを知らされた尊い感謝の時でした。

（その三）

「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない（詮かたつくれども望みを失わず）。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。」

（二・コリント四・八―一〇）

三月二一日、やっと胸の方の経過も良好で、レントゲンもだんだんと素人の私が説明を受けても固りつゝあることが判って来ました。

その説明を先生からお聞きしましたその日の午後でした。先生から、「少し尿に糖が出ていると本部検査室から連絡が有りました。まだ軽症だそうですが血糖値と尿糖値とは共に胸の回復に大きく関連します。糖の数値が良くなれば、他の病気も自然と比例して良くなる性質のものです。少しその方も合わせて治療して行く事にしましょう。心配ないですよ。」とは言われたものの、内心穏やかならず、大へんな胸騒ぎでショックでした。家内は少しも驚いた様子もなく、「お父様、神様はあなたがどんな状態であっても共にいて守って下さるのだから信仰もって行こうよ」と言って祈ってくれました。「うん、判った判った」。本人は何が判ったのでしょうか、いい加減な返事でした。

そして前述と同じ様にお祈り致しました。「神様私の体がこんな状態です、血糖値と尿糖値が胸の回復に大きな影響をもっているとの事でございます、軽症だそうですが、糖尿病としての診断が出されました。どうぞこの事に於いてもお言葉を下さいませ、大へん苦しんでいます、大きなショックでございます」、とまたも主の御前に立ち返ってお言葉をいただき度いとお願い致しました。その時にお与え下さいましたのが「詮かたつくれども望みを失わず」（元訳）であります。その中でもお

言葉の強さは、あなたがどんなであっても、家内が祈ってくれました様に「神様が共に居て守って下さるのだから」、の言葉と「詮かたつくれども望みを失わず」途方にくれても行き詰まらない、全く尊いお言葉を頂戴致しました。「望みを失わず」であります。

それから来る日も来る日も、三月二三日から六月三〇日迄約一〇〇日間、朝六時、昼一一時、夕方四時と、一日に三回採血して食前の血糖値を計り、その数値によって薬の量を変えて注射をしたのであります。左肩から右肩、左足もゝから右足もゝとかわるがわるに打って行ったのであります。何と三〇〇回以上であります。今考えて見ますと良く辛抱もしました。良く耐えて来ました。来る日も来る日もでございます。しかしお言葉は真実であります。毎日この事が時間的に行われる度毎に、〝望みを失わず〟、〝望みを失わず〟、邦次よ、神様によって、望みを失わず、必ず癒して下さることを信じて、耐えて行きなさいと、神様は御声を掛けて下さいました。誠に苦痛の連続で何度床の上で涙したかわかりません。それから約二ヶ月過ぎの五月一五日、先生から、「一寸と来て見ませんか」と、五月一日のレントゲンを見せていただきました。先生から、「何度も苦しい処を通ったが、努力の甲斐がありましたね。レントゲンも今一歩の所迄来てますよ。血糖値も一一〇台で安定して来ているし、大へん良好です」、とおっしゃっていただき、毎日毎日、採血、検査、注射、検尿の繰返しの日々で、身も心もヘトヘトになっていた時でしたので、大へん救われた思いでした。そして、「もう外に出ていゝでしょう」と、許可が降りました。まさしく救いの時でした。「体を使って運動することは糖尿には必要な事です。しかし胸には安静が第一ですから、良く考えて進めて下さい、決して無理は禁物です」、とお話しがありました。

神様こゝまで支えていただきまして有難度うございました、と感謝を捧げたのであります。さあ、外へ出ても良いとおっしゃられて家内に靴と他へ出られる服装も整えていただいたのですが、いざベッドを離れて歩いて見ますと、体力がほとんど無いと言って良い位な衰えた状態でした。神様有難度うございました。今度はどう進めることが先生の言われる双方の病気に一番良い事でしょうか、この体力しか有りません、どうぞ神様教えてやって下さい、とベッドの上で伏せって祈っておりました。

少し体を休めて、ぼつぼつ運動の事も考えてはどうか位な事ではないかと思ってました。すると、神様は即刻のお返事でした。私もハッと思った位早く、（1）安静時間は厳守し体を休める、だらだらしないこと。（2）散歩、歩行の体力ならしは、安静時間の合間に。（3）体に合った運動を始めなさいのお答

えでした。

途方にくれても行き詰まらない、そのお言葉通り、神様は真実な方で、また厳格な方です。私の方が、こんなに採血、検査、注射と、来る日も来る日もヘトヘトに疲れているにもかゝわらず、右の如きご命令で、こんなになってまだこの上にこの様なお答えですかと大へん苦しみました。それを実行することは大変な努力が必要ですし、神様が共に居って下さるから、と思う思いと、どこ迄も実行することの、ギャップはどうすることも出来ない位でありました。病院に居て疲れるなど、不思議な思いがしますが、神様のご命令ですのでその日から毎日運動、歩行が一日のスケジュールの中に組み込まれることになりました。来る日も来る日も、歩行訓練を行う日々となりました。六月一五日、一ヶ月後、一寸と疲れてましたが、歩行訓練をしていましたら、井上先生の車とバッタリ道路で出合いました。すると車の中から「なんとあなただったのか。良く歩ける様になった、頑張ったネ、もう安心だ、無理しない様に」、と励まして下さいました。この声こそ本当に神様のお言葉の如く、こんな者を愛して下さっている先生の言葉に涙し、感謝を神様に捧げた次第であります。先生が、多勢の患者さんの中にあっても、私如き者に愛をもって接して下さっているご愛をはっきり受け止めることが出来ました。この様に、「望を失わず」の聖言には権威があり、弱い私にも一言一言、噛んでふくめる様に聖言のみ力を表わし賜います。その権威とみ力とは、この身ではとても受け止めて行けそうにない位でありました。

「中風の者に、『子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ』と言われた。すると、ある律法学者たちが心の中で言った、『この人は神を汚している』。イエスは彼らの考えを見抜いて、『なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』と言われた。すると彼は起きあがり、家に帰って行った。群衆はそれを見て恐れ、こんな大きな権威を人にお与えになった神をあがめた。」（マタイ九・二一―八）

私に取りましては、これ以上もう肉体も霊も限界で、どうにもならなくなった時ですら、神様は一たび聖言を信じて立った弱い弱い、信仰のあるのか無いのかわからない、なまぬるい私を助けて、更に深く神様の権威とみ力を示して、神様を崇める者となれと励ましていただきましたお恵みを感謝せざるを得ません。日に日にぐんぐんと癒しの御手を持って、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と導いて下さいますお恵みを、有難度

うございますと、受け止めた日々でありました。

「そこで、彼らはイエスに言った、『神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか』。イエスは彼らに答えて言われた、『神がつかわされた者を信じることが、神のわざである』。（ヨハネ六・二八―二九）とイエス様を信じて、聖言に頼りすがって歩く時こそ、どんなに行き詰まっても、詮かたつきても、必ず望みを与えて下さいます。たとえ肉体も霊もメロメロになりヘトヘトになっても良いではありませんか。詮かた尽きてもいゝではありませんか。その時にもなお、望みを持たせて下さる神様が共に居て下さればそれで良いではありませんか。邦次よ希望を持ちなさい、神様によって望みを持ちなさいと、そして神様のお言葉には忠実にお従いしなさいと生き生きと励ましていただきました。

（その四）

「そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」

「この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。（元訳）」（マルコ一一・二四）

二月一二日からの入院生活が始まって、まだ体も不充分でベッドの枠をもってそろそろとつたい歩きをしている私に、家内が「東京の雅文から、福岡に帰り度いと言ってきました」、と伝えて来ました。東京の会社には、福岡に帰してほしいと申し込んであるそうです。

私はベッドの上で、何で私が倒れたこんな時に、しかも何の手立てもなく帰りたいとはどういうことかと不安に襲われました。どうする事が一番良いのかと考えに考えましたが、何とも良い案が浮かびません。私が病床でなければ、と思わされる日々が過ぎて行きました。

「神様、雅文が福岡に帰る事を決心している様です。この問題についても、何の手立てもなく帰福する様ですが、神様私にお言葉をいただきたい、お言葉を下さい」、とお願い致しました。そしてお与えいただきましたお言葉が、最初に掲げました、「祈りの時その願う処のものは得たりと信ぜば必ず得べし」でございました。二月が終り三月に入り、雅文の事につきましても、得たりと信ぜば必ず得べし、と福岡に於ける就職も唯このお言葉を信じて祈るのみでした。雅文にも私にも何の手立ても有りません。どうぞ主のみ旨のまゝにお取扱い下さいませと、毎日来る日も来る日も、雪を眺めて祈って参りました。三月末日、雅文は、荷物を福岡に送って、東京の皆さんに別れを告げて帰って参りました。

そして、帰った足で初めに私を見舞ってくれました。「どうでした、東京の生活は」、と聞きました。まず返って来た返事は、この仕事は時間的に観念なく、昼となく、夜となく、夜中となく、コンピューターのハードとソフトの噛み合いが悪いと出て行かねばならないし、誰も動いてくれる人はなく、こんな事が続いていると、自分の体がその内どうにもならなくなると思ったそうです。「六年間も頑張ったので大きな勉強にはなったが、眼がやられそうだよ、眼が疲れてね。この儘だと東京で三〇才、三五才迄やっても、最後は企業から捨てられて何も残るものはなく、体はボロボロになる丈と思い、思い切って、何の手立てもないが帰ることにしました」、との事でした。そこでまず三人で右のお言葉に寄りすがって祈り、得たりと信ぜば必ず得べし、待ち望んで行こうと心を決めて進むことにしました。四月、五月もあっと言う間に過ぎて、六月一八日、(株)CISより就職契約がしたい、出来れば今日中に保証人を決めて出社して下さい。急も急、大へんなスピードで就職が決定、神様はこんな弱い者の祈りと、尊いお言葉に寄りすがる何の手立ても持たない者にさえ、この様に道を開き、無から有を生じなさる素晴らしい神様を知らせていただいて、家内、雅文、私と三人で、感謝の時を持つことを許して下さいました。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える」(エレミヤ三三・三)

津留崎先生からいただいたお言葉通り、得たりと信ぜば必ず得べしでございました。お言葉は全く真実であり、適切に、私共に主のみ旨を示して下さいました。お言葉は素晴らしい力を表して下さいました。

(その五)

「それからトマスに言われた、『あなたの指をこゝにつけて、わたしの手を見なさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい』。トマスはイエスに答えて言った、『わが主よ、わが神よ』。イエスは彼に言われた、『あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである』。」

(ヨハネ二〇・二七―二九)

七月六日午後三時、井上先生から、診察室に一寸と来てごらんなさいと、呼び出しがありました。何事かな、七月四日のレントゲンが余り良くなかったのかなあと思いつゝ、先生にお会い致しました。

レントゲン写真をじっと眺めて、杉婦長さんと話して居られました。三枚のレントゲン写真でした。一番左がとても美しい奇麗なレントゲン写真でした。それを見、思わず、このレントゲンは、と問い正すまでもなく、質問するでもない様な言葉で

した。

井上先生が、「三枚ともあなたのだよ」。五月一日、六月一日、七月四日の三枚でありました。「今度の七月四日が、急にこんなに美しく回復しているとは思えない位美しいと、今二人で話していた処だよ。でも本当に良かった。お互いに努力の甲斐があったね」。杉婦長さんも「良く頑張ったね、これは見事だ」。私は嬉しさの余りついほろり、井上先生も、婦長さんも、感激して居られたのかじっと写真を見て居られました。そして井上副医長がおもむろに、「杉婦長、この写真を保健所に送って、入院解除（退院）の手続きをして上げて下さい、一日も早い方が良いでしょう」。私はとても口に出来ない喜びで胸一杯でした。

七月八日、私の印鑑を押して、写真は保健所に送付されました。七月一三日（入院五ヶ月）、保健所より入院解除が許可になって、レントゲン写真が返って来ました。そして各部署を廻って、一八日に杉婦長さんの手元に戻って参りました。四時過ぎに井上先生が、「大丈夫だった、お目出度う、もういつ帰っても良くなりましたね」。保健所からの添書に〝随分早い回復でした〟と書かれていました。

七月二六日午前中に退院許可になりました。嬉しくて小さな胸は張り裂けるばかり、どうする事も出来ない位で、家内に早速電話をしました。家では、両親と共に涙の感謝を神様に捧げて下さったとの事でございます。

この時に私は、神様から「邦次よ、今私はあなたに告げました。そして喜びに満たされているでしょうが、あなたはレントゲン写真を見た時、『これは私のですか』、と全くトマスと同じ思いであったでしょう。この事は信仰生活には、大切な大切な事柄です。なぜ信仰をもって神様を信じて、レントゲンの前に立てなかったのですか。レントゲンを見たので信じたのですか。『見ないで信じる者はさいわいである』、と聖書にあるでしょう」、と神様から悟されました。「あゝ神様、本当にそうでした。見ないで信じて神様からさいわいをいただける者、どんな状態に置かれても、如何なる困難な問題の時でも、見ないで、手ざわらなくても、神様を信じて、感謝の出来るさいわいをいただける者にして下さい」、と神様にお願いをいたしました。

ここに、主の御手にい抱かれた病院生活が終ろうとしている時、どうしても、手ざわり、結果を見ないと、そして結果がわかってからでないと本当に感謝の出来ない、おろかな弱い信仰の私に、神様はこの様に迫って下さり、本当に神様を信じて進めて行くべき残された生涯に、見ずして信じ、祈りの時にその願う処のものは、得たりと信ぜば必ず得べしと、常にお答え下さる神様を仰ぎ見て精一杯、神様と共に歩むものとなるため、

この病院生活を私にお与え下さったのだと悟らされ、本当に感謝を捧げる事が出来ました。神様有難度うございました。わたしはエホバにして汝を癒す者なればなり、と大石さんからいただいたお言葉です。身も霊も、新創造されての退院となりました。本当に有難度うございました。七月二五日、ベッド最後の夜は、もう感謝と感激で、泣き泣きお祈りを致しました。

八幡の榎本利三郎牧師奥様、福岡の榎本和義牧師奥様、教会の皆様方や友人、知人、親戚や両親兄弟の尊い厚いお祈りを身に受けて、癒され、立派に回復をお与えいただきました。そのお一人お一人に、心からなる感謝を捧げるものであります。

又、日曜礼拝、火曜会のテープをいただいて、常に教会で皆様と共に礼拝を捧げさせていただいているのと同じ様に、テープの生きた聖言に、どんなに力付けられ、苦しい時に、涙のなぐさめになりましたかを思います時、どんなにお礼を申し上げても、なお足らない思いでございます。そして、倒れてから退院まで暖かく見守って下さいました井上先生、杉婦長さん、ナースの方々、又一日も欠かすことなく、まことに雪の日も大雨の日も常に暖かく見守り支えてくれました家内にも、感謝の皆勤賞をあげたい気持ちで一杯です。

「汝者従我」

H・T

会堂の母子室の正面に、「汝者従我」の額がかかっています。これは、文語訳の「汝は我に従へ」、口語訳の「あなたは、わたしに従ってきなさい」。（ヨハネ　二一・二二）の中国語版聖書による聖言だそうです。

野村末義兄の書で、兄独特の気品ある書体に、き然たる風格の兼ね備わったみごとな書です。わたしはこれを見るたびに、主の御声をそばに聴く心地がして大変恵まれます。

「汝は我に従へ」。これは厳しいご命令ではなく、恵みに満ちたお招きだと思います。

ことに、複数の呼びかけでなく、「汝は」と、単数で呼びかけをしていただいたところに、主が名指しで呼んでおられるように思えて、嬉しい気持ちでいっぱいになります。

メソジストのジョン・ウェスレーが、

「神共にいます、これ最も良きことなり」。

と死の間際に主を讃めたということですが、毎日、ひと足ひと足をお従いしていくときに、「主と共にいます」恵みを味わうことができると思います。

主に従って歩む所こそ、正に「乳と蜜の流れる地」であり、豊醸、安息の地であります。

更に聖霊に導かれて、主に従い歩く者となりたいと、祈っています。

「わたしの愛のうちにいなさい」

― 主イエス様に感謝 ―

大楽明代

「わたしの愛のうちにいなさい」（ヨハネ一五・九）

今、私は主イエス様に感謝します。平成元年一一月二八日、「わたしの愛のうちにいなさい」の聖言を胸に、胃の手術のために手術台にのぼりました。これで手術台にのぼるのは二度目です。一度目は、その前四年、耳の手術の時でした。昭和六〇年の九月、この時は、「我が恵み汝に足れり」の聖言に支えられ救われました。その都度、戸畑教会の先生、皆様にお祈りしていただきありがとうございました。

そもそも初めはこうです。私のおばが福岡にいます。戸畑教会が建った頃紹介してくれました。「早く神様を覚えなさい」ということでした。それまでも、悩みは人一倍の私でしたが、まだ健康でした。子、真之に水泳・ピアノをやらせたりしていましたので、中々日曜の礼拝には出かけられませんでした。毎日忙しくバタバタとした暮らしをしていました。おばからは、「お祈りしなさいよ、私も祈っているから。」と、いつも電話の向うから聞こえてきました。

そんなある日、夏でしたか、耳の具合がおかしいので近くの医者に行きました。たいしたことはないとのことでしたが、秋になってもはかばかしくないので大病院の方へ診せに行きました。そこでは、「これは『真珠腫性中耳炎』といって、手術の他ない」と言われ、目の前が真暗になったような気がしました。目に映るものがすべてモノトーンで（白黒）、はっきりしない位でした。買物もそこそこに本屋に立ち寄り、医学書を立ち読みしますとこわくなりました。

「真珠腫性中耳炎」名前はやさしく聞こえますが、中耳の中に真珠のようなものができ、そこらの骨をけずり乍ら大きくなり、頭骸骨まで行くと大変なことになる。（かぜをひいたりしてウィルスが侵入するとか）読めば読む程心細くなりました。

それからは、毎日ハラハラとおちつかぬ日々を過しました。思いつめているとき、ふっと主イエス様に信じておすがりする外はないと思いました。手術前、教会に行き祈りました。先生

にもお話しして祈っていただきました。私も、何もわからぬまま「主イエス様どうぞお救いください」と、祈りに祈りました。

そして、九月二四日市立病院に入院、三〇日に手術でした。五時間以上かかったそうです。「我が恵み汝に足れり」のみことばを心に、手術してもらい救われたのです。その後、病院ではとても心安らかでした。経過も順調で、一ヶ月で退院することが出来ました。

入院中は、伊規須先生にもお忙しい中お見舞にきてくださりお祈りしていただき感謝でした。おばも両親も兄弟たちも皆きてくれ、私はとても幸せを感じました。

おばは、こういいました。「明ちゃんおめでとう。私も神様に感謝します」と、泣いてよろこんでくれました。それは、「これであなたが神様を覚えたこと、神様もあなたを覚えてくださったのよ、よかったね」とのことでした。いろいろ話してくれました。神様は愛する者を訓練され、そののち幸せをくださるんですね。その時はつらいばかりで、私だけがどうしてこんな目にと悲しんだり、家のこと、子、主人のこと心配でした。でも、神様はお恵み深いお方です。すべてのことがスムーズに進みました。感謝いたしました。

さて、退院は元気一杯、一人でタクシーで退院しました。佐賀の母が来てくれるというのを、元気だからと断って帰宅しました。

家の中は、主人と子どもの二人暮しで、すごくちらかっていて、子供は学校で留守でした。そろそろと張りきって片付けて子どもの帰りを待ちました。そのうち「お母さん帰っていたの」とよろこんでくれた時は、私も涙が出そうでした。次は主人です。定刻にならないと帰らないのに、待ち遠しくて、冷蔵庫の中の有り合わせで夕食を作っているうち帰ってきました。おたがい「ただいま」と言い合い笑いました。とても幸せでした。親子三人の夕食を前に、主イエス様に感謝しました。

それから耳の通院生活が始まり、経過も順調な日々が過ぎ、通院も間遠になり、戸畑教会へも金曜会にお祈りに行けるようになりました。これも神様のお恵みです。感謝です。金曜会の皆様と聖言にふれるのが楽しみでした。おいのりもよくできない私ですが、一週間のことを振り返り、いつも、今あることを感謝しました。

そして二年も過ぎた頃でしょうか。耳の手術から四年目、平成元年のことです。子供、真之も中学二年になり、クラブ活動の吹奏楽で頑ばっていたので、同クラブの母親何人かでお世話係ということで飛び廻っておりました。体も余り丈夫でない私でしたが、毎日がんばらなくっちゃと思い、気まかせに廻り過ぎ、後で考えたら神様への感謝を忘れて無茶をした気がします。

暑い夏を過ぎた頃から胃の調子が悪くなり、病院に行きました。胃の透視、胃カメラ、組織検査の結果、すぐ切らないといけないと言われました。泣くのも忘れる位、途方にくれ、おそろしくなりました。お医者様は、初期だから切って取ってしまえば一〇〇％大丈夫といってくれました。やっとわれに返り、主イエス様お救いくださいと祈りました。そして主人に連絡し、明くる日、記念病院で入院の手続きを取るあわただしさでした。

その次の金曜会の時、先生にも報告し、お祈りをしていただきました。金曜会の皆様からも心よりお祈りしていただき、励まされて勇気を出して帰りました。

一一月二〇日に入院し、手術の日、二八日がやってきました。私は主イエス様に守られ、「わたしの愛のうちにいなさい」の聖言を胸に、手術室に向いました。不思議と、不安もおそれもありませんでした。ただ祈りました。信じました。

――それからどれ位時間が経ったでしょうか、体中がバラバラで痛くて目が覚めました。集中治療室のベッドの上でした。あゝ生かしてもらっているんだな、うれしい、主イエス様ありがとうございました。その後はＩＣＵで同室だった人たちと同じ経過で、順調で、一日して病室にもどり点滴治療が始まり、朝から晩まで十日位続きました。私の佐賀の母や妹も来て看病してくれ、私はほんとうに恵まれているんだなと、点滴の長い時間感謝したり、いろんなことを考える時間をいただきました。皆に迷惑かけてこうなったのも、神様からいただいた命を、時々感謝を忘れて無茶をしたからかなとも考えました。でもゆっくりする時間を与えてくださったのです。今からもっともっと感謝を忘れずお祈りしようと反省しました。

点滴もとれて傷もきれいになった頃、又々伊規須先生、金曜会の方々のお見舞を受け、お祈りしていただきました。皆様それぞれ忙しいそして寒い中、心よりお礼申し上げます。

その後の入院生活は平安な日々を過ごしました。私のベッドの廻りの人々も、次々と、入れ替り立ち替り手術していく人たちと生活を共にしましたが、この平安を分けてあげたい気分でした。

「すべての訓練はその時は悲しいが後になればそれによって鍛えられて平安が与えられる」というような聖言が又思い出されました。

すべて体の方は順調との事でした。日は経ち、暮れも迫り、一二月二六日退院することができました。子供が冬休みに入ったばかりで迎えにきてくれ、二人でタクシーで家に帰りました。耳の時同様、家の中はちらかっていましたが、私が病気したばっかりにこんなだなと、すまなく思いました。四〇日位で帰り、

なつかしく涙が出ました。主イエス様ありがとうございました。二人で片付け、私は動けないので、子どもに頼んで片付けてもらいました。四年前とは違い、少し、いやずいぶん頼もしく感じました。とはいうものの、あれもこれも頼み過ぎ、私の思うように行かずつい口げんか、でも心の中では感謝でいっぱいでした。こうして、二度も入院して再々元気に帰ってこれたことは、主イエス様のお救いがあったからこそです。信じます、ありがとうございました。

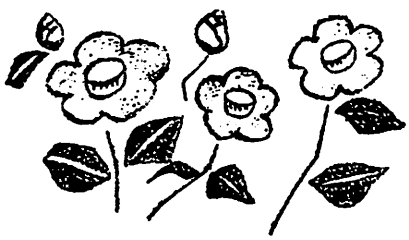
そして新年がやってきました。福岡のおばが来てくれたので、お腹の皮がまだつっぱってましたが、新年聖会に出さしていただきました。楽しく過ごすことができました。

その後、通院生活が始まりましたが、胃が小さくなったせいか食べられず、体力がだんだんもたなくなり、何をするでも疲れが出ました。入院中はあんなに元気だったのにと不思議でした。すぐにすっかり元に戻るんだと早合点していました。食事も、自分で工夫して根気良く何度も分けて取るのを忘れていたり、面倒がったりしたせいでした。何だか毎日が不安になってきました。何と信仰うすい私でしょうか。これまで、こんなに救っていただき、なやむのですから。金曜会も、通院の主治医の日と重なって中々行けなくなりました。不安になるとひたすら祈りました。伊規須先生に何度も来ていただきお祈りしていただき感謝です。その時いただいたテープを聞いたり、賛美歌を聞いたりしています。

時々行く、病院の検査の結果は良いとのことで、もう心の問題です。主イエス様、この弱い心を強くしてください。支えて下さい。平安をお与え下さい。私も一歩踏み出して励み信じます。こうしてお祈りお願いできることを感謝します。又、私のために多くの人々が祈って下さり、今の私があります。ありがとうございました

これからもこの信仰うすき小さな私ですが、共に主イエスに信じて生きたいと思います。皆様のこともお祈りしております。

感　謝



家庭礼拝

緒方　とみ子

「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」（マタイ一八・二〇）

一九九〇年五月一三日（日）、主人が、神様の前に立ちました（受洗式）。皆様の厚き祈りの賜物です。本当にこの日を待っていました。

昨年のクリスマス頃から、体調をくずして仕事を休んでいた主人に、思いもかけない恵みが与えられました。それは、神様を知る機会が多くなった事です。おまけに、不信仰な私が反対したから、是非にという気持も湧き、仕事の行きがけに、戸畑教会に通いながらの先生との個人授業（バプテスマの準備会）が、自分の身についたそうです。あの時、先生と二人で歌った霊感賦をそれは楽しそうに歌います。そして、その事が今、更に大きな恵みと祈りにもなりました。

伊規須牧師より勧められ、六月一四日（木）に、第一回の家庭礼拝を始めた我家ですが、本当に静まって、神様と交わる一時を大切にしたいと思って祈ります。日毎に充実し、祈らせていただく方も増え、遠方にいても本当に心強く、神様の御恵みでさせていただける集会です。聖言通りに二人から始めた集会ですが、時には御客様も見えられ、にぎやかな時もあります。

◆八月一八日（土）午後一二時三〇分〜一時（司会者＝昌隆兄）

◎時間になって集まり、しばらく静まる　◎讃美歌……六六番　◎詩篇の交読……二三篇　◎お祈り（自由祈祷）　◎テキスト（使用しなかった）　◎霊感賦……三一番　◎主の祈り（全員）。第二〇回目の家庭礼拝でしたが、福岡市にいる正野栄子さんと敬士君と、遠賀郡岡垣町にいる正野潔君の三人が、丸三団地の「ふれあい夏まつり」に来た時の集会です。子供達を通して教えられ、本当に楽しい集会となり、主人は、一九日も続けて集会をもちたいと希望したのです。

◆九月三〇日（日）。今日は、私の司会で、場所は筑後川。勿論、「カナ」もつれての集会ですから、どうなる事かと祈っていましたが、主人は大賛成。この場所は、源太郎（柴犬の雑種で、一九八六年頃に飼った）を、夏に連れて来て洗った場所でもあり、思い出多い所なのです。大きな川を前にして、腹一杯、二人で讃美させていただきました。（第二七回目）

◆一一月一一日（日）。戸畑教会の礼拝を待ちのぞんでいたのだが、疲労気味の為に出掛ける事が出来なかった主人は、夕拝へと祈っていたが、やはり出かけられずに、家庭礼拝となった。この日は、お互いの愛歌を讃美し、なぜだか五曲も歌っている。

いつも、時間はわからないが、大体三〇分位かかっている。（第三五回目）

◆一二月三一日（月）。記録係（私）が、感想を書いているのだが、この日は、なかなか集会の時間が定まらなかった様です。しかし、踏み出せば、主との交わりがどれ丈大切なものなのか、二人ともわかった様だと、書いています。（第四一回目）

◆第四二回目をしたのは、年明けて、一月六日（日）の集会でした。一日と五日に、戸畑教会の新年聖会に行き、祈りの秘訣を教えていただいたものですから、いつもつまずいていた祈りを、主人は、スラスラと言えたそうです。成長が早いのにはおどろかされます。

◆二月一日（金）。主人は、疲労の為に目が見えないからと言っては嘆くけれど、病院ぎらいもあるのでしかたがないと思っているが、湾岸戦争の戦地に行って闘い、死にたいと言う。「神様から与えられたら行きなさい」、としか言い様のない私でした。（第四七回目）

◆三月三一日（日）。今日はイースターです。三連休している主人ですが、仕事が忙しく、なかなか家拝がもてずにいたので、大変感謝しました。人身事故に会った隆も退院して、感謝しました。（第五二回目）

◆四月一九日（金曜集会）に、初めて主人と戸畑教会に行きました所、その一週間後に、覚えていて、家庭礼拝をもちました。一歩先に越された、と思いました。近頃は、二人して、眼疾で落ちこんでいますから、気分次第で集会をもったり、なまけぐせが出たり、色々な集会記録が出来ておりますが、私は、近頃本当に、心からの祈りが出来る様になりました。これも、家庭礼拝で祈る時に、神様が直接私に教えて下さったものであると思うのです。

「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」

（コロサイ二・三）

――不便もまた楽し――

伊規須　泰子

〔引越し歴〕

生まれは東京の杉並、小学校一年一学期まで。そこから九州、大分県臼杵へ。戦争を経て、祖父の死により宇佐郡の田舎へ。やがて八幡製鉄所へ勤めていた兄を頼って北九州市八幡へ。そして兄と共に八幡前田教会へ行くようになった。保育所に勤め

るようになり、兄と共に住込んだが、すぐ兄と別れ、大学へ通う弟と生活。五年ぐらいして結婚、戸畑区小芝に安住の地を得た。

それから三五年間、根を生やしてきたが、今度は大がかりな引越し（と言っても仮住いから又元の所に帰る）を味わうことになった。

〔処　分〕

さてさて、長年生活していると荷物がどんどん増えてくる。使わない物でも愛着があって捨てがたい。この際、思い切って処分しようと決心した――大国に帰る時は何も持たない筈だもの――。莫大な処分をしたつもりだったが、アレマア、移り住んでみれば荷物の山また山。仮住いのうちに整理して、身軽にしておかなければ。

〔集会室〕

心配だったのは集会の場。来て見て驚いた。事務所だったためか、ドンピシャリの大きな部屋があった。対角線状に机を並べたら、素敵な集会室となり、主をほめたゝえている。

〔住む所〕

移ってきたのは三階建ビル。一階は天井の高い工事場（時々仕事に来て、鉄の切断や熔接をして大きな音を立てる）。二・三階を借りている。

〔食　事〕

小さな炊事場があった。食器棚を運び込み、冷蔵庫を入れ、食卓迄入れる。食卓の上にテレビを乗せたら、立派な食堂になってしまった。道具類は必要最小限にとどめているが、都市ガスがきていない不便があった。電気釜、電熱板で食事の用意をしていたが、電磁調理器を与えられてあらゆる調理OK。少々の不便も工夫次第で楽しいものとなる。

〔階　段〕

入口の重い扉を開けたら、ちょっとした空間があって階段となる。高さ二二㎝、巾二一㎝の急な石段が一〇段あり、ちょっとしたおどり場があって、更に一二段となっている。少々巾狭く高いので、来られる方にはお気の毒だが、運動のつもりで踏みしめ登り降りすれば、これも又楽し。

〔屋　上〕

更に、三階へ行くために階段が一五段。事務室が三ヶ所あり、広い屋上があるのです。見下せば工事現場は一望。

早朝に日中に夕方にと、絶えず屋上に出る。雲ひとつない日、掃いたような雲が流れている日、覆いかぶさるような曇の日、吸い込まれそうな天を仰いで、詩篇一九篇を口ずさむ。

〔祈り、憩いの場〕

三階の一番奥には、社長室のような部屋がある。必要に応じ

て接待の部屋にもするが、私の大事な祈りの場所、そして憩いの場所。どうぞいらっしゃって下さい。一緒にお祈りいたしましょう。

〔洗濯は〕

さて生活に戻って、最初は、欠くべからざる洗濯に困ってしまった。洗濯機からの排水ができないと思ったから。ある日のこと、ある人のヒントから、三階の屋上へ水を流すことを教えられ、さっそく運び上げた。水道はある、しかも水は非常によく出る。これで解決!!

天気のよい日は屋上に洗濯物がはためき、忽ちにしてカラカラに乾いてしまう。お日様のなつかしい匂いが心を暖める。イエス様の御血潮で洗っていただけるさいわいを思う。

〔植木鉢〕

持ってきた植木鉢（さつき、君子蘭、観音竹などなど）一二〜一三鉢を屋上に置く。太陽の光はサンサンと降りそそぎ、水はたっぷり与えるし、最高の場所と思っていた。ところが、風当りが強い、それに理由がわからぬまゝ、だんだん葉が枯れてきた。サタンのいたずらか、何か警告しているのか、分らないが慌てて部屋にとり込んだ。やがて、さつき一鉢は全く枯れてしまい、他のものも危い!!原因を教えて下さいと祈っているところ。

〔お風呂〕

残念なことに、ここには風呂場もシャワー室もない。と言うことで、風呂屋通いとなった次第。久しぶりの風呂屋通いだが、それが何と気持のよいことか。広々とした湯舟、勿体ない程よく出る水、湯、シャワー。電気風呂、泡風呂もあるのです。ぽこぽこ音を立てる大きな湯舟にゆったりとつかると天国の心地。家庭風呂で味わえない、こんな楽しみも与えて下さった。無いという不便もまた楽し。

〔就　寝〕

実はここには、畳、板張の部屋がないのです。故に日中は靴、つっかけで過ごさねばならない。不便だな…と思ったが、なんのなんの、案外スムースに過ごせる。ところで、就寝は長椅子を向い合せて即席ベッド。人間とは、ある環境を与えられると、それに順応していくものか？いやいや神様が支えて、快よい眠りを与えて下さっているのだと、こゝでも不便さに感謝!!

〔希　望〕

今不便？いえいえ、不便さの中に楽しみもある。あと半年もすれば、新しい家が建て上げられ、出て来た所に帰る楽しみがひかえている。今は仮住い、この地上はもともと仮りの住いで、やがて美しき御国に帰られるのだ。

その日を待ち望んで、不便のなかで楽しみを見つけながら、

感謝、感謝と歩かせていただいている――。　以上。

一九九一・五・一五

神様はいつも

菊池　修

神様はいつも
私のそばにいて下さる
疲れたときも
苦しいときも
いつもそばにいて
助けて下さる
いやして下さる
疲れ果てたときは
お休みなさいと
憩わして下さる

神様はいつも
どんな時も
最善に
導いて下さる

神様
本当にありがとう

永遠の課題（水は方円の器に従う）

緒方　とみ子

「美しい娘を」との願いが、コスモスの花で彩ったと言われる、わが街、北野町は、秋深い十月半ばになると、旧陣屋川堤防沿いのコスモス街道に、赤・白・ピンクと色とりどりのコスモスの花が見事に咲きそろいます。コスモスの花に誘われて歩くと、二・七㎞の街道もあっという間……。（明るい田園都市より）

この街道を私は、久留米方面に向かって自転車で五〇分余りかゝる久留米東町教会（日本キリスト教団）に行ったり、主人の姉宅へ事務の手伝いに行ったりします。その街道沿いに、わが北野団地（一五五画）はあり、個性豊かな建売住宅の家々を

眺めながら、乗り覚えた自転車で、犬の散歩に走りまくるのが、日課となっています。

息子（Aとする）が、高校卒業して就職し、ホッとしているのも束の間、言葉や都会生活が合わなかったのか、仕事がきつかったのか、私と主人の思い（親の有難さ）と願い（石の上にも三年）もかなわず、あっさりと一年で帰って来てしまった。

無言の電話がかゝって来る様になったのは、Aが確か、県外から帰って来た頃でした。おまけに、夜半にAの友人達の電話でうんざりしていたのは事実でしたが、まさか、無言の電話が私にある事の決断をさせる事になるとは、思ってもみなかったのです。祖父母育ちで、わがままで、自分勝手な性格は、氷山の一角かもしれないが、我家にもルールがあるのだから、それに協力して欲しいと思って祈ってはいましたが、親元から離して生活させるのも良い経験になるのではないかと、お互いの納得済みで就職させたものの、忍耐もせず帰ってきたAに、私はがっかりした。そして、少しはかわっているのではないかと期待したのがまちがいで、時が経つにつれ、学生時代よりも横着で、生活態度も無茶苦茶でした。そんなAを、私は正してやりたい一心で、時には意見もし、親子げんかもたびたびしましたが、なかなか認めてはくれませんでした。

「主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であって、よく教え、よく忍び、反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神は、彼らに悔改めの心を与えて、…」（二・テモテ二・二四―二五）。この聖言が私の心に響いたのは、この頃でした。

それは、私が夕方近く、電話を取らない事から始まった。「明るくって、おとなしそうに見える青年ですね」と、外では評判の良いAだが、つり上がった目を更に上げて、訳のわからない言葉で私にくってかかった。私は、いつも見かねている事を言うのはこの時だと思い、寝ていた主人をゆり起こし、「三者会議をしよう」と言った。日頃からくすぶり合っている仲だと知っている主人は、おもいっきり言わせた方が良いと思ったのか、「腕ずくで、とことんやってみろ」と、まるで暴力団です。するとAは、「あんたはこの家に来る前は、『★★★ちゃん』と呼んでいたのに、今は呼びすてにする。いつも自分が正しいと思って一方的にものを言う。（紙に書いたりしておかしい）。自分の失敗は、いつも笑ってごまかす。あんたは口達者で頭の回転も早く、ペテン師だ。クリスチャンとはそういう者か。『家をのっとるので、たたき出せ』と友達が言ったが、今は良くしてくれるので、そう思ってはない」などと、怒りにまかせておそろしい言葉を続けました。私は、どの様な言い方をすればわかってくれるだろうかと、言葉もわからずに、唯、一

生懸命になって、「呼び方が悪いのなら、これから『殿』でも『様』でも付けて言って上げるが、あんたにそう呼ぶのならお父さんも『★★★様』となるからネ」と、まるで小学生に言う様な言い方です。そして私は、「クリスチャンとはこういう者だ」、と話をする機会が与えられました。するとAは、「きれいな人間の行く所で、あんたは例外だと思っていた」と言い、笑いながら、「自分もいつか教会に行って、あばれてみたい（？）」とも言いました。私とAが衝突する時はいつも主人がいませんが、今日は幸いにして……と思っているのに、主人はいつの間にか夢心地なのです。そして、（又うまく逃げられたか）と、がっかりしました。ところが主人は、私が畳をたゝきながら、「どこにきれいな人間がいるのか、居るのならここに連れて来なさい」、と説得しているのを聞いて、（さすが九州の女だ。度胸がある）と思ってすっかり安心して、これなら大丈夫だと思ったそうです。しかし一方的だと言うから、Aにも言わせてみると、考えもなく人の言いなりで、言いたい放題です。この三年間あんな目で見ていたのかと思うと、がっかりするやら阿呆らしいやら、本当に情けない新人類だと思いました。

「兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。」（ローマ一〇・一）

私も、人生をふりかえる歳になったのでしょうか。Aの歳には、眠たき目をこすりながら朝四時に起き、家業（豆腐屋）を手伝い、そして炊事をし、洋裁で独立する為に一生懸命働いていた頃の事を思い出し、辛抱して働いて行くという忍耐もないAにとって、このままで本当にいいのだろうかと、つい老婆心を出して注意する私ですが、これからどんな言葉で接していけばいいのだろうかと、本当に毎日が戦いであり、主にある勝利の旗を振る日はいつの事かと、祈りの課題はふくらむばかりです。

数日後……ぼんやりと庭続きの赤土の多い所を見ていて、ふとこの戦いの事を思い出しました。この場所は、一時野菜を作って楽しませてもらい、感謝した所でも有りますが、残念な事に、次の年は不作で、きっと私の勉強不足も手伝っていると思うのですが、草花がうまく育たない所で、本当に忍耐がいります。時を待てず、ほじくって見て様子をうかがい、芽が出ているのを見て安心したりするへんな私ですが、「神様、どうか黒い土をお願いします」、と素直に祈れば、本当に簡単だったのです。ところが、自分の思いや考えで、複雑にし、全てを捨てるまで長い間かかりました。原因は根がはらない赤土が多い事とわかりました。Aにも、これから先、独立させ大人として行動させる様にしました。そして、私に出来る事は、「この魂の上にも、神様の救いのみわざを起こして下さい」と、祈り続けて行く使

命が与えられている事をつくづく覚えます。

「受けるよりは与える方が、さいわいである」

（使徒二〇・三五）

（一九九〇年戸畑教会の標語）

『死んだ犬』

野村末義

少年ダビデは、イスラエルの国王であるサウルの気分が悪い時に、いつでも彼が琴を弾いて王様をなぐさめておりました。その少年ダビデが、羊飼いの息子として育ったんですけれども、その羊飼いダビデは絶えず王のそばにあって、そして、その病気の時には、たえず琴を弾いて王様をなぐさめ、励ましてきました。

このサウル王様に、息子であるヨナタンという少年がおりまして、このヨナタンが、ダビデを非常に愛し、またダビデもヨナタンを愛していたという、そういう仲でありました。

そして、かたや王の息子であり、かたや羊飼いの息子であるという、身分の違い、家柄の違い、地位の違いがありましたにもかかわらず、彼らは二人とも、本当に親友として深く愛しあった仲でありました。

ところが、王様が、だんだん病気が激しくなり、やがてダビデは、その王様から自分の命を狙われるようなはめになるわけですけど、これは皆さんご存知のとおりでありますけれど、ところが、やがてヨナタンが、「私の父の亡くなった後に、必ず王の位につく人だから、あなたがもしも王になった場合は、私と私の家族と一同の者の面倒を見て欲しい」という、そうした依頼をダビデに申します。

やがて、ペリシテ人との大激戦がおこり、サウルも、その息子ヨナタンと共に、戦いに敗れて死んでしまいます。

そして、戦いが終わってダビデは、サウルとヨナタンが亡くなった事を聞いて、かつてヨナタンと約束した、サウルの家のものをかえりみるということを思い出したので、しもべたちに命じて、サウル王様にかかわりのあるものが誰かいないかと捜したところ、いたのが、メピボセテというヨナタンの息子であったのであります。そこで彼は、このメピボセテというヨナタンの子供を、しもべに命じて、彼の前に呼び出したのであります。

これが、サムエル記下九章五節から九節にあります、メピボセテの伝記であります。

ここに、標題として『死んだ犬』、と書きました。「死んだ

犬」とは、元気で生きている犬でしたら主人に飼われて、あるいは愛され、あるいは恵まれ、主人の膳から落ちるパンくずで豊かに養われて、生き生きと生きることができたに違いありません。しかし、ここにあります「死んだ犬」といえば、もはや、その価値は全くありません。死んだ犬ですから、皆だれでも嫌います。これは共通の考えでありまして、死んだものは、皆、葬ってしまいます。ドロに埋けてしまうか、あるいは溝の中に捨てるかでしょう。こういう末路になるのが、「死んだ犬」でございます。

ところで、ここで、メピボセテが王の前に呼び出された時に言ったことばを読んでみましょう。

彼は言いました。「王様、何故私が、この死んだ犬のような私をどうしてお呼びになったのですか」、と言っております。しかしダビデは、「ヨナタンとの約束があるから、これを覚えて、お前を呼んだのである」と、そして彼はそのメピボセテを自分の家に召しよせ、そして彼を、自分の家の食物をもって養うという、そういういきさつになるのでございます。

ところが、このメピボセテというその人は、幼ない時、乳母の手から転げ落ちて足をいためたために、小さい時から生涯足が悪くて、自分で立って生活ができなかったという、そういう、みじめな人生であったのにです。

使徒行伝にもそのようなことが書かれていますが、美しの門に毎日連れて来られて、足の動かない人が、施しを人に乞うて、そして生活をしていたということが書いてありますが、そのような人生を彼もやはり送らねばならなかったメピボセテであったと思います。

ですから、このような醜い自分をどうして王様が王の家に迎えてこれを愛してくれるのですか、と訝ったのは当然だと思います。

私たちはどうでしょうか。この死んだ犬のようなメピボセテが、自分で言ったその犬と同じように、神さまにさからい、キリストは何だと蹴飛ばしてきた、そしてまともな人生を歩くことができない、惨めな人生を送った私どもを、神さまの方があわれんで、こんな仕方のない、汚ない、見るも無惨なこの姿の、まるでドロまみれの死んだ犬のようなこの者を、きよめて、そしてりっぱな生きた犬として育てるためにキリスト様があの十字架の上に、罪のない方が罪人となって、きれいな方がきたないものとなって、罪人のあの醜い姿になって、十字架について下さった。この尊い十字架のあがないの故に、今、私どもは拾われて、彼と同じく、王の席に連なり、毎日毎日、王様の生活と同じような、王の宮殿に住んで生活しているのです。こんな死んだ犬のごとき者が、主イエス・キリストの契約のもとに、

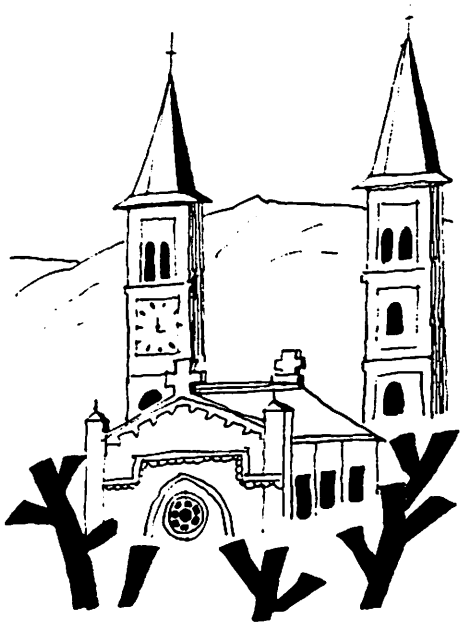
あがなわれて、いやされて、新しくされて、そして今日、天国市民として、毎日主の、王の王のそばで安んじておられる生活に入らしていただきました。十字架をあがめて、心から感謝でいっぱいであります。

八〇歳の今日、信じて救われてもう六〇年、その生涯の重みをしみじみと味わうこの毎日であります。

いやいや、これだけではいけません。これからもさらに、置かれた立場で、今は病床生活にありますけれども、なお、ここから、あなたがたは世の光だとおっしゃいます。また、地の塩だと言われます。この世の光としての使命を、また地の塩としての味わいを豊かに持ち、この置かれた一日一日のこれからの生活を、主の前に歩みたいと、心から願っておる次第であります。

これで、私の証しを終わります。

一九九一・六



特集

― 前田教会創立50年誌 ―

“燃ゆる柴”によせて

前田教会創立五〇年誌「燃ゆる柴」を手にして以来、既に一年余が過ぎました。この記念誌を受け取られた皆さん方から、たくさんの便りが寄せられています。

また、この「燃ゆる柴」編集委員会の皆さんの、感謝会でのお証もまとめていただきました。

そこで、今回「燃ゆる柴」特集として、感謝会のお証とお便りの要旨とを掲載させていただき、今一度、皆さんと共に感謝し、聖名を讃美させていただきたいと思います。

「燃ゆる柴」

第一二回編集委員会議事録

とき　平成二年七月二九日　午後一二時三〇分

ところ　予備室

司会　正野兄　記録　原田兄

出席者　榎本先生　牧師夫人　広田兄　林兄　河本兄
正野兄　筑山兄　野村兄　野村姉　大田姉
高木姉　原田兄　（一二名　全員）

(1)　礼　拝

讃美歌　八七B、五三七

お祈り

聖　書　Ⅱテモテ　二・一―七

「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである。」（Ⅱテモテ　二・六）

説教

この記念誌「燃ゆる柴」を作るにあたり、神様の尊いご用に加えていただき、始めから終りまで、皆さんが様々な中で、苦労や困難が多かったと思いますが、それだけに出来上った喜びは、苦労した人程大きいのではないかと思います。

繰り返し、繰り返し、原稿を読み返すことで、校正にあたる私共が恵まれるという、大きなものがあったのではないでしょうか。

この五〇年誌を、こうして作らせていただいた、これは神様が私共に特別に、そういう恵みの秘訣を教えて下さったのではないでしょうか。「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである。」と、ありますように、だれよりも先に、私共が恵まれたということを、もう一度感謝し、そのことを心に置いて、これから先も、主の前に喜ばれる歩みを続けていただきたいと思います。

お祈り

讃美歌　二七六　（第一部終り）

中　食　一三：〇〇～一三：三〇　（和室で）

(2)　感　謝　会　（予備室で　一三：三〇～一五：三〇）

霊感賦　二六

（中食をいただいて、再び予備室に移り、記念誌完成の感謝会がもたれ、今回編集の軸となって活躍くださった、正野兄より記念誌完成までの総括的な経過報告があり、続い

て広田兄より各担当の方々に対して、ねぎらいの言葉が述べられた。その後、各担当の皆さんの、この一年間編集に携わっての感謝のお証が続いた。）

――お証順次――

広　田兄（総括）
牧師夫人
原　田兄（原稿）
野　村兄（週報）
高　木姉（週報）
野　村姉（週報）
大　田姉（原稿）
筑　山兄（年表）
河　本兄（名簿）
正　野兄（原稿）
林　　兄（写真）
榎本先生（結びのおことば）

讃美歌　二七六

（第二部終り）

※以下、感謝のお証をテープより写し取り掲載しました。

「恵みを数えて」

広田　寿

先ずはじめに、ご一緒に主を讃美しましょう。

いまにいたるこそ　主の恵みなれ…　（霊感賦二六）

今日、完成しました「燃ゆる柴」を前に、神様からいただいた恵みを数えて、編集にあずかった者として感謝いたします。

（一）祈りに応えられ、願いに勝る結果を見せて下さったこと。一年前に、だれがこんな立派な記念誌が完成できると想像したでしょうか。ほんとうに内容にふさわしい装丁となりました。感謝であります。

（二）聖言をもって、機に合う助けをいただいたこと。一二回に及ぶ委員会で、その都度、聖言をもって助け導いて下さいました。丁度、八〇パーセント位でき上った頃でしたか、ホット一息ついて腰をおろしたくなった時に「私達の内なるものが燃やされていなければ」と出エジプト記三・二の聖言を通し、もう一度「燃ゆる柴」の原点に帰り、立たせていただいたこともありました。

（三）一人ひとりがみ霊に導かれて、知恵と力を与えられ、ご

用にあずからせていただいたこと。

一年間の長期に亘り、楽しく、いろいろと学ぶことができました。長丁場でありましたが、やりがいをおぼえて取り組ませていただきました。

回り道も幾度かありました。しかし、無駄ではありませんでした。積んだり崩したりで、皆さんにも、また印刷屋さんにも迷惑をかけました。馴れない者がやりますので、やっていくうちにいろいろ教えられたことでした。

私共には、幸いなことに、祈ることによって、み霊の導きをいただくことができます。知恵を与えて、先々を見せていただき導いて下さることを今回特に教えられました。

（四）よき印刷屋を備え、導いていただいたこと。

これは、多く語る必要がありません。前にある、完成された記念誌を見れば十分であり、感謝です。

（五）必要の一切を満たして下さったこと。

当初は、一七〇万円位という概算見積もりでした。最終的には、部数も増えましたがその倍額近くなってしまい、このため祈りつづけて参りました。神様は必要の一切を満たし、編集を進めさせて下さいました。大きな感謝でした。

（六）「燃ゆる柴」が、祝福をいただいて配本できたこと。

出来上がった記念誌を先生に祈っていただき、神様の祝福を受けて皆様に届けることができました。これを手にされた皆さんが、いよいよ主の愛の火に燃やされつづけますよう祈っております。

（七）各編集担当をふりかえって

〈原　稿〉

草稿、記述、これは大変な仕事でした。特に「教会五〇年の歩み」は圧巻というべきで、労作でありました。

次に、テープからの起稿ですが、記念感謝会を始めとし、私はどうも原稿用紙に書くのは苦手だが、話すことなら、とおっしゃる方のお証を収録し、原稿にしていただきました。

それからカットの選択。これは、内容に相応しいものを余白に合わせてという方針で、校正の度に余白も動き、何回となく配置替えがありました。カットの数は九二。

また、校正も五回に亘り、原稿担当を中心に毎回委員全員で手分けしてやりました。頁数は一巻二六〇、二巻一二〇、字数は約三〇万字、大きな数字になりました。

〈週　報〉

教会保管のものや、皆さんから寄せられた膨大な資料をよく整理して、教会史の基盤とし、年表作成等の足掛かりとしていただきました。

〈年　表〉

教会五〇年間の聖会メッセージ、教会の歩みの記録収集、一般世情のまとめなど、微に入り細にわたる作業をしていただきました。

〈写　真〉

皆さんからお借りした旧い時代も含めた貴重な写真を、選別編集に当り、あれも入れたい、これもぜひというものばかりの中から、限られた紙面に並べて見ては崩し、の繰り返しがつづきました。片寄らないようにも努力していただきました。

それに、撮影の追加や、複写という作業もあり、出来上った記念誌を見ますとき、ご苦労をうかがい知る思いです。使用した写真は一八一枚となりました。

〈名　簿〉

信者、求道者及びその関係者を含めた調査、整理、結婚、召天者の調査、配本先の宛名作り、名前の誤りがないかなどにも配慮していただき、ページ数は少ないが、とても時間のかかる作業でした。

一年間、恵みに感じてご用を果たしていただいた各担当の皆さん、ありがとうございました。本日の感謝会をもって、委員会は解散となります。

今日まで、記念誌のためお祈りいただきました教会員の皆さんに改めて厚くお礼を申し上げます。

牧師夫人

何から感謝してよいか分りませんが、こんなに素晴らしい記念誌が出来るとは、思ってもいませんでした。

神様は、私共の五〇年の歩みにこのような記念誌を与えて下さったことに、ほんとに、どこまで神様は素晴らしいことをなさる方かと、ただ、感謝でいっぱいです。

また、この一年間皆さんが、それぞれの分野でほんとに感謝と祈りをもって、編集のお仕事に携わって来られたことも、何よりの感謝だと思います。

それと、もう一つは教会員の皆さんが、この記念誌のために常に背後で祈っていて下さったことも、感謝でございます。

この五〇年、神様が私共に恵んで下さったことを、心を新たに感謝したいと思っております。有難うございました。

原田　駒一郎

今回、この「燃ゆる柴」の編集委員の一員に加えていただき、ご用をさせていただきましたが、もちろん、このような仕事は初めての経験で、私にはとても出来そうにない大役でしたが、

神様に祈って助けていただいて、また、皆さんに支えていただいて、こうして終りまで全うできたことを感謝しております。

その中で一番私の心に残りますことは、寄稿下さった皆さんの下書き原稿を、規定の原稿用紙に書き替える作業を、約八〇枚余りさせていただきましたが、こうして完成した記念誌の中に、そのお証文章を拝見し、感慨無量の思いがいたします。

この一年、記念誌のために祈り続けて下さった皆さんに、心からお礼申し上げます。

野村末義

私は、今日この完成した記念誌を見まして、実に、神様のなさることが素晴らしいものであると言うことを教えいただきました。

神様の働きは、私共の願う所思う所に勝ることをなして下さると言うことを、しみじみ感じております。

それで感謝もまた大きい訳です。私はこの編集委員の中に加えていただきましたが、実際は、編集どころか何も出来ませんので、委員の中に置いていただいても、油虫かゴキブリみたいで、ちょろちょろと出て来てはツツキ回して結果を悪くするような、とんでもない者ですが、このご用の端に置いていただいて祈らせていただきましたが、ほんとに皆さんがご苦労下さって、こういう立派な記念誌が出来ましたことに、更に、大きな感謝を捧げるものです。

知恵も力も経験もありません私ですが、皆さんに支えられて、こういう結果を見せていただいたことは、主の有難い恵みだと感謝しています。

この小さき者にも、こういう恵みを十分に味あわせていただいて、神様をほめたたえることが出来ることは、何よりの感謝でございます。

また、多くの方々が、この「燃ゆる柴」をとおして、お一人おひとりが燃えていただくために、これからも祈らなければならないと思っております。

高木ツルヱ

立派な「燃ゆる柴」が出来て感謝しました。

私はこの編集の期間を通して、神様から教えていただいたことは、事に当って、落ち着いて神様に信頼することのできない自分であると言うことを、はっきり示していただきました。

ご用の途中で、原稿用紙が一時行方不明になって、慌てふためいたことがありました。

「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」とイザヤ書三〇章

一五節にありますが、自分の歩みを見れば失望するほかありませんが、こんな私を許して下さるイエス様がおられるゆえ幸いです。

なにも出来ない者ですが、ローマ人への手紙の九章一六節にありますように「それは人間の意志や努力によるものではなく、ただ神のあわれみによるものである」。神様のあわれみによって編集委員に加えていただいたことを、今静かにふり返って、限りない感謝でいっぱいです。

神様の懇ろなお取り扱いを受けて、今日、皆様と一緒に感謝をさせていただくということは、ほんとに恵みだったと思います。

御聖霊が「燃ゆる柴」を通して、わたくし達のうちに愛の炎をもやし、いよいよ、神様を崇め聖名をたたえることができるように、これからも祈り続けたいと思います。

野　村　美恵子

何も力のない私のような者を、編集委員の中に加えていただきまして、今日、こうして完成した「燃ゆる柴」を前に、皆さんとご一緒に喜び、また、感謝できることは何と素晴らしいお恵みでしょうか。

先程から皆さんがおっしゃっておられるように、私も知恵も力もなく、ただ、引張って下さる方々のご指示どおりにさせていただいただけで、この喜びの中に置いていただきました。

初め、週報の係をといわれ、数少ない週報から一つ一つ記事を拾って行きながら、私達もこの地に参りまして教会生活四〇年、昔の古い資料から、忘れかけていたいろいろな思い出を、もう一度見せていただき、神様の恵みの限りないことを思い起こさせていただいて、感謝と讃美をもってご用をさせていただきました。

途中欠席したり皆さんにご迷惑ばかりおかけしましたが、このような者を神様はあわれんで下さり、用いて下さったことをどんなに感謝してよいか分りません。

先程の聖言どおり「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである」、ほんとに神様のお恵みに与からさせていただき、感謝でございます。

榎本先生がよくおっしゃるお言葉に「恵みに感じて」、とございますが、恵みに感じて奉仕するのではなく、奉仕させていただく心を持って、この場に置いていただいたことを感謝せずにはおられません。

この記念誌を私の四人の弟妹に贈らせていただき、私共が歩いて来た道を少しでも分ってもらいたい、神様のことを少しでも知ってもらいたいと思っております。先日、妹から電話があ

りましたので、そのことを話しましたら大変喜んで、早速取りに来ると申しておりました。有難うございました。

大田邦子

教会の創立五〇周年記念誌の発行という大事業の中に、編集委員に、しかも原稿係など勿論はじめての経験、何が出来るだろうかと、不安で一杯でした。でも今は加えていただいたことを感謝しております。

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

最初の準備委員会でこの聖言をいただきました。回を重ねる毎に、五〇年間の週報、年表、写真、証しの原稿等が集められ、膨大な資料の山に驚かされました。でも一回一回の準備会には、祈りに助けとなる聖言をもって導かれ、力を与えられ、見事に進めて下さる生ける主にふれさせていただきました。

今日出来上った立派な「燃ゆる柴」を前にして、事を行い、事を成してこれを遂ぐる、と仰せになられるお方が、完成させて下さいました。こうして手にして開いた時は、言い尽くすことの出来ない感動と感謝でした。

榎本先生ご夫妻、委員の方々が心を一つにして、お祈りしながら、検討に検討を重ねていらっしゃる謙虚なお姿には、心を打たれました。今までに味わったことのない、主にあるお交わりの素晴らしさ、この処においていただきましたこと、私には大きなお恵みでした。

この主のご愛に押し出され、新たにされて日々歩み度く願っております。

本当にこの様な者をも、尊い記念の五〇年誌の編集のご用に加えていただきまして有難うございました。

主のみ名を崇め心から感謝致します。

筑山文彦

私は、年表を担当させていただきましたが、この出来上った記念誌を見まして「事を行ない、事を成して、これを遂ぐる方」とありますように、主は素晴らしいことを成して下さいました。

このような者にも、時計のネジの一つとして、ご用にあずからせていただき感謝しております。

この「記念誌」のために、それぞれに適材を主が与えて下さって完成を迎えましたことに感動を覚えるところです。

実際このご用に携わり、自分のやったことが十分満足できるものではありませんでしたが、その中で、一つのネジとして用いられたことに心から主に感謝しております。

「燃ゆる柴」雑感

河本信生

「燃ゆる柴」所載の教会員名簿作成を担当させていただき、委員の皆様に助言をたまわりながら仕事を進めました。

充分な時間を与えられながらも、時の流れは驚くほど早かった気がします。早朝と深夜に時間をやりくりして、信徒会・エステル会の記録を調べ、「みぎわ」を参考に電話連絡網や縁籍関係など、いろいろ教えていただきながら作業を進めてまいりました。

また、古い信徒会のプリントなどを探し出して見ますと、かつて熱心に教会に来られていたのに、去って行かれた方もあります。こういったことを通して、導きの不思議さ、選びの重さというものを覚えさせていただきました。

私は、この編集委員会を通して、主に在る交わりの安らかさ、信じることの強さ・美しさ・安らぎを教えていただきました。

所感が二点あります。そのひとつは、委員の皆様各々が持っていらっしゃるタラントの豊かさです。行き届いた配慮で計画が進み、困難に思われたことも、すぐれたチームワークで見事にクリアされていく爽快さ。主のみちびきで、文字どおり適材適所の分担を皆様が力を尽くし、時を惜しんで立派に遂行された集中力は素晴らしいものでした。

一年間、月に一度の編集会議は私の日常業務の対極にあるものでした。砂漠のオアシスのように心の安らぎを与えられる場でした。

日頃、長時間労働・重量品の多頻度運搬作業を伴い、「三K」つまり、汚い・きつい・危険であるということから、とりわけ若者に敬遠される問屋業務に携わっておりますと、通常は営業上接触する狭い範囲だけの人間関係に限られてしまい、人間性の豊かさや可能性・善意といった人間の本来のあるべき姿とは無縁の日常になってしまっております。

取引先のスーパーなど大規模小売店に対する交渉力が弱い立場にある納入業者は、一方的に無理難題を押しつけられるという不合理な商慣習がまかり通っております。棚卸し・店頭販売の手伝いは当然のこととされ、その都度、人手を確保しなければならず、コストがかさむが過当競争体質もあって断れない。いつの間にか、商品取引に含まれる「当然の無料サービス」になっています。

このような労務提供、また良品の返品・多頻度少量納品・リベート・協賛金の強要など外から見て不透明な制度は、すべて利益第一・儲け最優先的商慣行から出ていまして、封建時代のカスがそのまま残っているのです。人間の欲が渦巻いているの

です。あるのは、徹底的なエゴイズム。

ですから、「主に在って」報いを求めず、感謝をもって、献身的に奉仕をなさる皆様のお姿に、より深い感銘を受けた次第で、これが第二点であります。

このプロジェクト・チームの一員に加えていただいたことによって清新な世界を見せて下さったご恩籠に、主のあわれみといつくしみとを感じます。

正　野　真　宏

私は、原稿係と事務局のご用をさせていただきました。今、河本さんがおっしゃったように、こういう編集委員会で、皆さんとご一緒に仕事をさせていただいて、「主に在って」ということを特に感じました。「主に在って」一つ思いになり、そして、皆さんがそれぞれの役割分担で、ほんとに忠実に、ご用をしていただいたということが素晴らしいことだと思います。

私自身、事務局ということでしたが、後半は殆ど、広田さんや原田さんにオンブにダッコした状態でしたので申し訳なく思っております。

先程広田さんが、それぞれの担当の方々に感謝されていましたので、今度は私から、皆さんを代表して、広田さんに対して、委員長として非常に頑張っていただき、各編集委員会ごとに討議する内容や、これからなすべきことをキチンと整理していただきました。

本来、これらのことは、事務局である私共がしなければならないところですが、それを代ってしていただき、それぞれに指示をしたり気配りをして下さいました。心から感謝申し上げます。有難うございました。

それから、私自身もう一つ、「教会五〇年のあゆみ」という大作を書かせていただくことをお引受けしたのですが、何処からどうやって構想してよいのやらさっぱり分らず、なかなか筆が進みませんでした。

「ぶどうの木」のバックナンバーを引っ張り出して、関係する記事を寄せ集め、教会年表を参考としながら構想を練ったのですが、なかなかよいイメージがわいて来ません。祈って書き始めますと、すらすらと書けるようになりました。

ある時は、通勤途中の電車の中で書いたりしましたが、今考えて見ますと、ほんとに皆さんの祈りに支えられて書くことが出来たのだと、深く感謝しております。

林　正二郎

私も、この「燃ゆる柴」を拝見させていただき、素晴らしいものが出来たものだと感謝しました。

私は、写真の担当ということでしたが、最初は何処から手を着けてよいのか分らず、一時はボーッとしていた状態のときもありました。気を取り直して私なりにボツボツ資料集めをしていったのですが、整理の仕方もよく分らず、どうしてご用をさせていただく資格のない私のような者が、編集委員に加えられたのだろうかと、落ち込んだ状態の時もありました。

こんなことではいけない、神様のみ旨なら、喜んでさせていただこうと、ひたすら祈って、み霊のお導きを得て最後まで全うさせていただいたことを心から感謝しております。

先程、正野兄が広田兄に感謝されておられましたが、私も、ほんとに広田兄を始め、多くの方々の背後からの援助があってこそ、ここまで出来たことをお礼申し上げたいと思います。

先程から、皆さんのお証を伺っておりますと、「自分みたいな者、無きに等しい者」とおっしゃっておられますが、私はそれ以下で、最後まで皆さんについて行けるかと思っていましたが、この一年間、委員会のご用を無事務めさせていただき、こんな素晴らしい記念誌の完成を、皆さんとご一緒に感謝できることが、私には更に感謝です。

この「燃ゆる柴」が、これから読まれる皆さんの心の中に、「今も神様は生きていらっしゃる」ということを、改めて教えていただき、皆さんが主を崇め、柴がいつまでも燃え続けて行くことを信じて、感謝しております。

榎本先生

皆さんのお証を伺って、私は今、感謝で胸がいっぱいです。

初め、正野さんに「ぶどうの木の特集号で『五〇年の歩み』を作ってもらえないだろうか」と相談しましたら、正野さんが「一寸待って下さい。実は、こうしたらどうでしょうか」と構想を持って来て下さいました。

その内容を説明していただいて、これは神様が素晴らしい道を開いて下さったのだと、この五〇年記念誌の編集に取り掛かることにしました。早速皆さんに、それぞれの担当を受け持っていただきました。

皆さん、初めてで素人ですと、異口同音におっしゃいますが、どなたも素人です。「私は出来ます」と言う人は一人も居ませんが、神様はあえて、こういう砕けた魂を用いて、神様のみ栄を表わして下さいました。

初めてから聖書的な編集委員会で組織化して下さって、私共を恵んで下さいました。皆さんお一人お一人が、ここで初めて

主にふれるような思いで、実際に問題にぶっつかり、そこで祈り、祈っては、また主に信頼してご用をさせていただいたことによって、初めに、あんなに心配せずともよかったのになあーと、今、感謝できるということは、それだけに主を信頼することは、どんなことであるかということを、お一人お一人が、身を以って主にふれさせていただく恵みのチャンスだったと思います。

そういう意味で、恵みに感じて、こんな者でも主からご用をさせて頂くというこの姿勢を持って、主に信頼して行けば行く程、主は大きな恵みをもたらして下さる方です。

先程感謝したように、五〇年後にこんな感謝が神様の前に捧げられるということは、自分自身思っていませんでした。

それが、こういう形で実を結ぶことが出来たということは、感謝です。神様がこんなに恵んで下さったということです。

今度は、タネとなって、あちらこちらに芽生えさせていただき、そこに実を結ぶのだということを考えますと、言うことの出来ない感謝にあふれています。

この五〇年誌の中に書いてあるとおり、この会堂は、金をかけた豪華さはないけれど、お金で買うことの出来ない、皆さんが恵みに感じて、一生懸命建てて、我が教会、自分だけの教会、をと、心のこもった奉仕によって建てられた教会と言うものは、神様の恵みの結晶と言うべきでしょう。

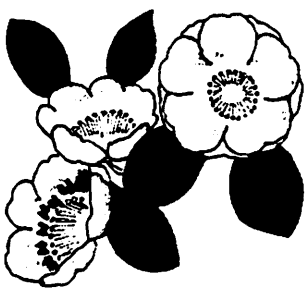
それと同じように、この記念誌も、お金があるから出来たのではなくて、神様からの恵みとして、私共が手にすることが出来ました。

そのことをもう一度感謝したいと思います。

ご用をさせていただいた、お一人お一人が言い表しているように、ほんとに謙虚な気持ちで事に当たられたのに対して、神様は、力を与え、恵みを与えて、その中で新しいことを教えて下さり、もう一つ前進ができました。

この五〇年誌の編集のご用にあずからせていただいた、ここからまた新しく、恵みに感じて、主にお従いして行きたいと思います。

お祈り



「燃ゆる柴」だより

「燃ゆる柴」を手にされた皆さんから、多くの便りが寄せられました。「燃ゆる柴」だよりと題して、ここにその一部を収録し、活ける主の賜う恵みを心にとめ感謝を新たにしたいと思います。

◎この度は、すばらしい教会創立五〇年誌を頂戴いたしまして、誠にありがとう存じました。

燃ゆる柴というすてきな主題、そして達筆の表紙、色彩、すべて目を見張るばかりでございました。これから燃ゆる柴を一頁づつ大切に読ませていただきます。ありがとうございました。前田教会の皆々様に感謝いたします。（M）

◎八幡前田教会ご創立五〇周年をお迎えになりました由、心からお慶び申し上げます。

その間の牧会と伝道のご苦労や、神様の限りないお祝福など、半世紀に亘るお足跡を偲び、敬仰一入に覚えた次第です。

また、本日は創立五〇年誌「燃ゆる柴」をご恵送いただき、有難うございました。早速拝読させていただき、ご啓発を賜りたいと存じます。（M）

◎五〇年誌「燃ゆる柴」ありがとうございました。本の内より燃える魂を身近に覚え、感動いたしております。

素晴らしい神様のご計画を、愛の一致を見せていただく思いがいたします。本当におめでとうございました。さらに新しい五〇年を力強く、祈りの中にお始めのことですね。私共も大きな目標として前進いたしたく存じております。どうぞ益々主の御栄光のため、ご前進下さい。（M）

◎本日は思いがけなくも、ご一同様の魂の光り輝きます五〇年記念誌をお送り下さいまして、まことに有難うございました。長年のお足跡を拝見いたしまして、感無量でございます。

殊になつかしい諸先生方のお写真も拝見しまして、昔日のさまざまの事を思い起こしております。

大望を抱き乍ら夭折いたしました亡夫も、さぞさぞ天国にて喜んでいることと存じ、改めてここに厚く御礼申し上げます。年令のせいもあって、殆ど篭り暮しでございますので、ゆっくりと日々楽しみに拝読させていただきます。（O）

◎半世紀に亘る伝道の歴史がつぶさに記録された、創立五〇年

記念誌をご恵送賜り、誠に有難うございました。

五〇年を懐古するそれぞれの立場から、神の子として神に従い、讃え、祈る切々の声が、文字となってよく表現されていて、その深奥をわきまえない不遜な私にも、何か自ら伺い知らされます。特に精神的、肉体的の度重なる受難の数々を乗り越えて、同じ道を求めて信仰の喜びを共にする多くの方々の先頭に立って、神の導きに従っておられることこそ、神の救いでなくて何と意義づけられるであろうかと思いました。

二部の構成によって内容が明らかにされ、教会、救い、信仰、思い出、歩み、年表等、余すところなく順序を追って記されております。殊に（二）の二四頁に及ぶ八〇年史は、神に献じた人生の歴史として尊く拝読いたしました。

また、表紙のみどりは、大自然の野山の草木を表わし、その中にあって燃ゆる柴は、神の恵みに包まれ、永遠に燃え続ける福音の喜びをもって、みどりの風のようにさわやかに印象づけられました。

巻頭言にあるように、次々と柴が加えられ、更に聖霊の火に燃やされて、今後更に五〇年、百年とさかんに燃えつづけていくことを願って止みません。（E）

◎ポストにドボンと大きな音がして、何やら送られてきた様子に、早速見てみましたら、ずっしりとした立派な記念誌で、その晩はおそくまで拝見させていただきました。

懐しいなあ、と思い出す場面や個所があると、時間がたつのも忘れて喰い入るように読ませていただきました。

記念誌を拝見して、一度、御地に伺ってみたいと思っておりますが、なかなか、実行できそうにありません。が、気持ちだけはそちらに飛んでいるようです……。（S）

◎先日は「燃ゆる柴」をお送り下さいまして、ありがとうございました。毎日繰り返し読ませていただいております。

前田教会のすばらしい五〇年の歴史の中に、主の限りないご愛とご祝福を目の前に見させていただきまして、主のなし給う業のすばらしさに感動申し上げております。

「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である」（イザヤ四一―一〇）

前田教会から遠く離れ、弱い小さな私でございますが、母教会の祈りに支えられ、主が共にいて下さるので感謝でございます。（S）

◎立派な記念誌を送って下さり、ありがとうございました。今も生きて働いておられる主の御業の数々を拝見し、力づけられ、

本当に感謝いたしております。

いま仕事の方で、責任ある事をまかされ、睡眠もままならない程忙しい毎日を送っております。燃ゆる柴を通して、「主に導かれ、主に遣わされた職場であるから、この主を仰ぎ見つつ信頼しておればよい」という、原点に立ちかえらせていただきました。（I）

◎折滝先生によります家庭集会でお恵みを受けられ、その後、昭和七年の新年聖会において、神様の御愛に満たされ、そのまま献身なされたご様子をお伺いいたし、心打たれました。六〇年にも亘ります先生のご信仰の御足跡を、心して読ませていただき、お恵みにあずからせていただきたいと存じます。（O）

◎先日は「燃ゆる柴」を送付していただき、誠に有難うございました。私、投稿を遠慮させていただいたのに、お手をわずらわせて、こんな立派な文にしていただき、お詫びとお礼を申し上げます。少しづつ、皆様のお証を読ませていただいておりますが、先生の意気と熱、信仰の深さを教会員がそのまま受けとって、素晴らしい信仰生活を送っておられることを感じ、猛省いたしております。

そしてまた、「信仰のふるさと」を持っている私を幸福に思います。（K）

◎先日は燃ゆる柴を送っていただき、皆様のすばらしいお証を、感慨深く読ませていただきました。

読む度に心新たに主に信頼させていただき、一人ひとり神様の前に生きていくということを実感させられております。一生持ち続ける記念誌になることを感謝しております。

私達も今日まで、神様の大きなお恵みと祝福を受け、多くの方々に祈り支えられ、守られて来ました。

今、記念誌の自分の箇所は恥かしくて読めない思いです。思う存分、胸を開いて記していないことを覚えさせられるからです。

……中略……五〇年の間、神様だけを信頼してこられた先生ご一家と教会のことを思うと、心から「すごいなあ」と思います。あのきびしい移り変わりの世の中で、わき目をふらずイエス様だけをみつめて歩まれた事実の重みを感じます。神様を信頼する信仰がなければ、とうてい歩めるものではないと思いました。私がフラフラするのは神様を信じる信仰がなく信じる事実をしっかり持たないので、いつも恐れと不安になる事です。あのこと、このことと、私の心は大きく揺れ動き神経が疲れてマルタと同じ状態になっていました。

「神を知らないばかりに苦しんでいる」。先生のなにげないお言葉も聞き流してしまいそうな一言ですが、事実が裏付けられているだけに、テープを何度も聞かせていただき、神様の前に歩ませていただく力を与えられています。私の救主であるイエス様にかたく信頼させていただきたいと切に思います。（I）

◎先達っては、御教会の五〇年誌をわざわざご恵送いただき、誠にありがとう存じます。

実は、私こと、昨年来白内障のために一年間、字を読むことも書くこともできず、もう八六才を迎えてすっかり諦めておりましたが、家族の者や教会の方々の切なるすすめに、本年六月、一切を主に任せて手術いたしました。主の憐れみと皆様の祈りによりまして、お陰様で順調に快方に向い、元の明るさを与えられるまでになりました。

立派な記念誌をいただきましてボツボツと読ませていただいております。細やかに御教会の様子が、目に見える様に伺われ、図らずもなつかしい貢兄の事をお書き下さいまして、ほんとうにうれしく存じました。幾度かくり返し読ませていただきました。

目が疲れますので、ボツボツと楽しみに拝見させていただきます。（T）

◎立派な五〇年誌を私共にまで贈って下さり、ありがとうございました。ずっしりと五〇年の重みを感じ感動いたしました。

昨年九月主人が腰を痛めてから、二月には体が動かなくなり入院してしまいました。痛みどめや、ストレスのため胃と十二指腸の潰瘍となり五月末には再入院。今は退院して自宅療養をしています。だいぶん歩けるようになり快方に向かっていますので、やがて出勤できるようになると思います。

わが家にとっては試練の時でした。希望を持ったり、落ち込んだりの繰返しで、それでも神様は、Iコリント一〇・一三のみことばの様に、色々な中から助け引き上げ、道を備えて下さいました。まだこれからもたくさんのたたかいがあると思いますが、神様が共にいて下さること、力を与えて下さること、そして道を備えていて下さることを信じて、歩ませていただきたいと思います。（K）

◎五〇年の記念誌、誠に有難うございました。

御誌を読ませていただき、先生ご夫妻の信仰による足跡が、如何に愛を持って神に人々に、神の愛を受けてご用に当られたかを知りまして、感銘深く拝察いたしました。

それにつけても、末永先生ご夫妻の私達になして下さいました祈りとご愛の数々を思い起こして、感謝を新たにいたしまし

た。末永先生はお召されになって、一六年目になります。榎本先生はご健在でご用をなさっておられる事とて、信者にはどんなにか喜んで信仰に励んでいられることかと存じます。

同じクリスチャンでも、導かれた師によって信仰のあり方が随分違うことですが、私達は誠に良き師に導かれ、信仰を育てられたことと思う度、感謝にたえません。

「愛する者たちよ、あなたがたは最も神聖な信仰の上に自らを築きあげ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち、永遠のいのちを目あてとして、わたしたちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい」とユダの手紙にございます。

聖言のごとく、主に救われ、聖霊によって祈り、永遠のいのちを目あてに歩む人生の幸を心より感謝いたしております。

無くてならぬものは只一つだと、おおせ下さった主のお言葉、年と共にその事を深く思う今日この頃でございます。（M）

◎燃ゆる柴、大へんありがとうございます。

明専との出会い、そして奥先生との出会いのところを読ませていただきました。明専の伝統「技術に堪能なる士君子」が生きているよき時代に学ばれた方々を羨しく思います。

先生は学生達に、勉学以外を語りかけられ、また学生は、先生に人生についていろいろなことを尋ねたことを、諸先輩から聞かされます。この頃は、そのような師弟間の対話はほとんど聞かれなくなりました。それは時の流れと共に人々の人生観、価値観に変化が生じたことによるのでしょうか。

技術に堪能なる士君子の伝統は、時代と共に埋没しつつあるように思われるのは、何としても残念です。私自身、その「技術に堪能なる士君子」の現代の人間像はどのようなものか、また士君子はどのような教育によって育成されるのか、自問自答いたしますが解が得られません。

いつの日か、この命題で先輩、同僚達と議論して理解を深めたいと考えております。

「燃ゆる柴」を拝読しつつ、私の感慨を申し上げお礼の言葉といたします。（M）

◎この度は立派な記念誌をご恵送下さいまして、有難うございました。早速、お礼申し上げなければと思いますものの、一週間余り寝込んでしまいました。気をつけながらも、体調がよいとつい油断して失敗をしてしまいます。

でも、病いの時は反面恵みの時と変えられ、感謝でございます。

七月の終りのご聖日の前後を、絶対安静で主人に食事の面倒をみてもらって、寝込んでおりました。ご聖日は礼拝司会のご

用の番になっており、それまでには治るだろうと思っておりましたのに、前夜になっても良くなるどころか、いよいよ苦しさが増し加わるようで、困ってお祈りしておりました。

昭和五八年、鳥取聖会で、榎本先生がお取り次ぎ下さった聖言、三人の盲人の目が開かれ、「わたしにその力があると信じますか」「信じます」を示されました。

「ああ、わたしはあの時の神癒会で立ち上れたのだ」と思い起こし、「イエス様、あなたにそのお力があると信じます、癒して明日の礼拝司会を全うさせて下さい」とお祈りしました。苦しかったのが取り去られ、当日司会のご用をさせていただくことができました。

神様は、いろいろな物を置いて訓練して下さるのだと思います。感謝をもって受けさせて下さる主に感謝しております。

未明より起きて、記念誌を拝読して恵まれております。ありがとうございました。（Y）

◎さて、この度は貴教会の五〇年をつづる貴重な記念誌を、お届けいただき誠にありがとうございました。

長い歴史の一時期ですが、私共の両親、祖父母も共に皆様と歩ませていただいたことを、主に在って誇りに思い喜んでおります。益々主の守りと導きにより教会が祝され、用いられますようお祈りいたします。（S）

◎燃ゆる柴五〇年誌をご恵送賜り誠に有難うございました。

御教会の苦節五〇年の歴史を読ませていただき、本当に感動いたしました。主のお体なる教会を、いかに主が愛し導かれてこられたか、只々、主の御名を讃美申しました。御教会の益々の前進をお祈りします。（I）

◎燃ゆる柴をお送りいただき、心から感謝申し上げます。

読み始めたら、あのこと、このことと懐かしいことや、そんなこともあったのかと、今更ながら主に感謝するなどで、止まらない美味しさ一ぱいの感じでした。

一人ひとりのお証のすばらしさと、幹に流れるイエス様に救われた者の喜びを、ひしひしと感じ、本当に素晴らしい教会に導かれたことを改めて感謝しました。編集委員の皆様に「ご苦労様」と申し上げます。そして私共も燃ゆる柴となるよう、今日も家拝で祈っています。（A）

◎創立五〇年誌「燃ゆる柴」（一）（二）をご恵送下さり、まことにありがとうございます。

牧会五〇年のご苦労に対し、衷心より深く敬意を表します。

記念会の時の信徒方のお証、先生の前後のごあいさつを拝見、如何に神と取組み、神の御手を動かす祈りをなさいましたかを、深く学びました。（Y）

◎五〇年誌を送って下さり、心より感謝申し上げます。
教会の歴史の中に、また救われた兄姉の信仰歴の中にも主の御業の確かさを感じさせられました。（S）

◎燃ゆる柴二巻共読ませていただきました。実に素晴らしい「後世に遺す最大遺物」とも言うべき出来ばえです。
この五〇年、命がけで福音伝道にあずかってこられた先生ご夫妻の喜びは、一番大きなものと思います。前田教会を通して救いにあずかった多くの方々と共に、この記念誌により、感謝と感激を新たにすることでしょう。（T）

◎五〇年の間、一つの教会にあって牧会、伝道なさいました先生ご一家、ご信徒も幸いなことと存じます。
生ける主イエス・キリストの教会のお姿、たくさんの方々の写真、また、素晴らしい皆様のお証、感謝しながら読ませていただいております。私共の小さな教会も、生ける主の御業にあずかりたく励んでおります。（N）

◎教会五〇年史をお届け下さり、誠にありがとうございます。
時代背景との関わりをもって記された教会史と、キリストの生きた証人たちの寄稿文、興味深く読ませていただいております。編集に関わられた皆様のご努力も偲ばれます。
御教会の益々のご発展をお祈りしつつ。（F）

◎燃ゆる柴をお送りいただき、主のご栄光であります、八幡前田教会を見せていただいて居りますので、神様の素晴らしい御聖業を味わいながら読ませていただいて居ります。御教会の上に主の祝福が豊かにありますように。平安　（Y）

◎五〇年誌ご恵送いただき、ありがとうございました。小さき私共のためにいつも御励ましを賜り、感謝いたします。
昨夜はおそくまで家内と共々に拝読させていただきました。私共の教会も今年創立二〇周年を迎え、記念文集を計画中ですが、御教会の五〇年誌には格別、心に迫って感銘いたしました。主の御栄光を拝しつつ……。（H）

◎先日は早速大切な御本を送っていただき、ありがとうございました。こんな尊いお恵みにあずかることができ、とても嬉しく感謝申し上げます。早速拝読させていただいています。

製本にあたり、先生はじめ皆様のご苦労によって出来上った恵みの糧として、お受けさせていただきました。本当にありがとうございました。（U）

◎本日は、創立五〇年誌をご恵送下さいまして有難うございました。

貴教会の、創立五〇周年誠におめでとうございました。主の導きみ業に畏敬の念を禁じ得ません。

先生もお元気になられ、更に、主のご用のためにご活躍なされておられますご様子、ただ感謝この上もありません。

更に、主の祝福が御教会の上に加えられんことをお祈り申し上げます。（G）

◎「燃ゆる柴」を沢山いただき、本当にありがとうございました。なんという素晴らしい、主の生ける証かと深く感謝いたします。子供達にとりましても、大きな遺産だと思いまして、我が家の宝とさせていただきます。（S）

◎昨日、御教会五〇年誌を私共にまでお送りいただき有難うございました。早速、感謝をもって拝読させていただきました。半世紀に亘って戦ってこられたました信仰によって、今日御教会が立てられ、主に在って守られ、かためられた教会員の皆様のお証を教えられ、祈りをもって続いて読ませていただきます。（A）

◎この度は、すばらしい創立五〇年誌「燃ゆる柴」を賜わり心より御礼申し上げます。

これからも、益々多くの人々の救いのために用いられる教会でありますようにお祈り申し上げます。（S）

◎「燃ゆる柴」をご送付下さいまして、誠に有難うございました。八幡に住んでいて、日曜礼拝に伺っていました、若い頃のことを、主人と二人で思い出して懐かしんでおります。

私も、つたない信者の一人として、「常に喜べ、絶えず祈れ、すべてのことに感謝せよ」の聖言を毎日心に思って歩んでおります。（H）

◎創立五〇年誌を御恵送に預り感謝しております。早速、全巻拝読させていただき、五〇年の歩みについて、キリスト者の活きづきを感激しております。

八幡前田教会は、小学生の頃、河本家の二階で日曜学校のときお世話になりました。転勤により、教会も異動先ごとの思い

出が走馬灯のように頭をよぎっています。
私が最初にキリスト教を学んだ河本家の、畳の部屋で歌った讃美歌が一番印象に残っております。（K）

◎この度は、創立五〇周年記念おめでとうございます。
私のような者にも、「燃ゆる柴」をお送り下さいまして、本当に感謝にたえません。
記念誌（一）（二）のどれを読みましても、主のご愛と、恵みがいっぱいで、涙して拝読させていただき感謝でした。
本当に有難うございました。ますます主の祝福が前田教会の上に、更にそそがれますようにお祈り申し上げます。（Y）

◎先日は、創立五〇年誌「燃ゆる柴」をお送り下さいまして有難うございました。
八幡前田教会の五〇年の歴史を読ませていただき、唯々、主の聖名を崇めさせていただいております。
御教会の上に、更に主の祝福が豊かにございますように、心からお祈り申し上げます。（Y）

◎先日は待望の「燃ゆる柴」を、さっそくお送り下さいまして、ありがとうございました。
皆々様の御労苦とお祈りと、主の愛の贈物に心から感謝申し上げます。
集大成されてみますと、改めて、前田教会の信仰の素晴らしさ、大きさ、強さをはっきりと見させていただいた思いです。私のつたない文章も、加えていただけたことは本当に嬉しく感謝なことです。（U）

◎前田教会五〇年誌を早速お送り下さいまして、有難うございました。幼い頃から、クリスチャンホームに育った私は、ぬるま湯の中で、のらりくらりとしながら、教会生活を送った日々もあったのですが、三十代にして、自分の生き様を真剣に考えるようになり、前田教会の門をくぐりました。先生の説教をとおして、神様の愛を信ずることができ、次の礼拝を渇いて待ち望んだ日々のことを、今、思い出して懐かしく思っています。（M）

◎今朝、五〇年記念誌を届けていただき、厚くお礼申し上げます。常日頃、先生の説教テープで励まされており、五〇年記念誌も読ませていただきたいと思っていました時だけに、神様の早業には驚かされました。
礼拝出席は厳守しておりますが、いづれ、御教会の木曜会に

出席させていただき、共に祈りに加えて下さい。（S）

◎主の御名を讃美し、お喜び申し上げます。

本日は思いがけなくも、創立五〇年誌をお送り下さり誠に有難う存じます。「燃ゆる柴」は、竹田俊造の「燃ゆる棘」とは共に意義深くつけられた表題として、思いを深くしてまず手に致しました。

大変に読み易い字体を選ばれ、嬉しく存じます。早速に拝読させていただきます。これだけ充実したものを編集されるには、誠に大変なご苦労であったことでしょう。

神戸の両親の苦労を見ておりますので感服の極みです。半世紀に亘るお働きの御祝福の結晶として、大切に読ませていただき、信仰の糧として、前進のために用いさせていただきたく存じます。（O）

◎先日、沢山ある配達物に混じって手にした小包、ズシーッと大変な手ごたえでした。大急ぎで開封し、次々と読ませていただき、気が付くと外は真暗、外灯もつけず、夕食の用意も忘れて読みふけってしまいました。

主人の帰宅によって時計を見ると、午後八時半、急ぎ支度して夕食時、感激を主人に伝え乍ら楽しい食事となりました。五〇周年、本当におめでとうございました。（U）

◎この度は、前田教会創立五〇年誌「燃ゆる柴」をお送り下さいまして誠に有難うございました。

巻頭のお言葉を感銘深く受けとめることが出来ました。残る生涯、主の御栄光に照らされて、燃える柴の一本になりたく願っております。（S）

◎先日は「燃ゆる柴」をお送り下さいまして有難うございました。朝に夕に、めがねをかけむさぼる様に読ませていただいています。ずいぶん立派なのが出来たものだと、編集者の方々の腕前に感心致しました。写真等なつかしい顔等ございました。

私も、来年で六〇歳になります。写真集に小さくのっている私、四〇年も前のことに、ただただ驚きです。

今は、神様からお叱りを受ける日々でございますが、前田教会のことは不思議と忘れることはありません。教会員の方々は、先生を通し、神様の偉大さを目の前にし、信仰を一段と深くされたことと思います。（U）

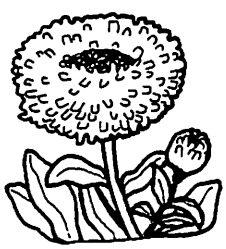
編集後記

。原稿締切りから半年余。発行が随分遅れてしまったことをお詫び致します。

。初めての事で、何をどのようにすればよいのか戸惑いましたが、「主はみずからあなたに先立って行き」（申命記三一・八）のおことばどおり、折に合った助けを与えて下さり感謝でした。

。また、皆さんの祈りに支えられ、このご用を全うできたことを感謝致します。

一九九一・一二



発　行　一九九二年二月
発行者　北九州市八幡東区前田一―一〇―三
基督伝道隊八幡前田教会
牧師　榎本利三郎
発行所　基督伝道隊
八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会
印刷製本　有限会社　秀文社印刷